それで東一わ、先小東一を自分の側において、今までよりもしつかり番をしなけりや成らず、北六から取り返した、東二の右の方の腕も、これから自分で抑える事になつたが、こうなると東一わいくら力があつても、體が何分小さいので、人一倍に骨が折れる。

それに又困る事にわ、東一わ至つて行儀が好く、神の極めておいた食物の外わ、決して口にわ入れないから、如何かすると腹が減つて成らない。

空腹い時に不味い物無し。他の者わそうなれば、道に落ちて居る物でも拾い、他の手の物まで奪つて食うが、東一わ決してそんな事わせず、ぢつと我慢をするのだが、先にわ東二と喧嘩をし、後にわ北六を相手にして、只さえ疲れて居る所え、其後荷物が殖えて來ても、食べた其割に進まないから、いよ〳〵腹が空いて來た。と、それを見て、

『どうだネ東一さん！　そんな重荷を背負つてるより、卸して食物と代えないか！』

と、云う者もあるが、

『イヤ〳〵、私わ神様からお預りしてゐるんだ。食わずに居てもこれわ放せない。』

と、力む。

『馬鹿正直な男ぢやないか。』

と、他の者わ、好い笑い草にして居るが、東一わ一向氣にも留めない。

けれども腹わます〳〵減る。仕方がないから西一に賴むと、西一わ氣前を見せて、特に辨當を運んで來てくれる。

それを眞似て西三や西五も、米を貸そうの、お茶をやろうのと、親切そうに云つて來る。東一わ嬉しいから、それ等を貰つて腹の足にするが、こうなると又困つた事にわ、それを恩に着せられて、先方が何か無物な事をした時でも、默つて居なければ成らない事もある。

これがまた東一わ、如何にも心外でたまらないが、何しろ食わなければ腹が減る、腹が減つてわ働けないから、仕方が無しに我慢をして居た。

四

さて隣の東二わと見ると、此間東一の爲めに、酷い目に會わされてからわ、すつかり弱蟲の正體を見破られて、誰も相手にする者もなく、自分も手出しが出來なくなつたが、元より神にわ見放され、大きな體の半分丈が、人間らしく殘つて居る許りて、後わ鬼になつて居るのだから、我と我が體の始末に、我ながら持て餘して居る。

それである時わ、さも〳〵人間らしく成つて、東一の所え相談をしかけて來る。

『なんと東一さん！　お前さんと私とわ、おんなじ黄白い土で拵えられた、同じ神様の子分ぢやないか。ひよんな事から一旦わ、お前と喧嘩をした事もあるが、元を質せば兄弟分、これからわ仲よくして、二人で人間の道を行こう。』

と、殊勝らしい事を云うから、元より東一わ喜んで、

『オヽ、好い所え氣がついておくれだ。元よりお前さえそう云う氣なら、何で私が否を云おう。實わ私わ初めから、お前が其の氣になつてくれるのを、何様に願つて居たか知れない。それにお前わ下だらない鬼に欺されて、私を邪魔に思うものだから、それで眞個の鬼共が、お前の弱いのを見くびつて、八方から狙つて居る。うつかりするとその連中に、お前が食われてしまやしないかと、私ア見て居て氣が氣ぢやないのさ。』

『イヤ、全く私が悪かつた。私だつてある時わ、小東一を食たくなつて、鬼の眞個をして見たが、今ぢやア全く人間になつたから、何卒見棄てずに助けておくれ！』

と、切りに賴むから、東一も其氣に成つて、其まゝ手を取つて行こうとすると、こわ如何に東二わ間も無く途中で手を振りはなして、他の道え行こうとする。

『オイ、お前何所え行くんだ？』

と、止めると一寸振り向いて、

『腹が減つてたまらない。彼所に梨が成つてるから、行つて食べてやるんだ。』

と、云う。

『そ、それが不可と云うんだ。そんな往來で物を食うなんて、人間のする事ぢやないよ。』

『ぢやア何か食わしてくれないか！』

『さア、それを食わしてやり度いんだが、實わ私だつて、人から辨當を貰つてる位なんだ。モウちつとの間我慢してくれ！』

『それぢやア人間と云うものわ、ひもじくつても食う事ア出來ないのか？』

『食つてもよい物ならば、元より食つても關わないが、自分の物でも無い物を、勝手に食べる事わ出來ない。』

と、云つて聞かされて、東二わ澁々引返したが、又未練そうに彼方を見て、

『アレ〳〵見なさい！　彼所ぢやアみんな食つてるぜ。ソレ、西三西五がよつて、林檎を精出して取つてらア。葡萄を旨そうに食つてらア……』

『他人の事わ何うでも可い。此方わ此方の道を行けばいゝんだ。』

『所が此方の道にやア、ろくな食物もありやアしない。』

と、東二わ又しても指を咬わえて、彼方の食物のある方を見る。東一わ苦り切つて、

『何と云う意地汚しだ。そんな根性がある間わ、まだ眞人間になれないよ。』

『いくら眞人間に成つたつて、腹がへつてちやア何にも成らんワ。やつぱり鬼と云われても、仕度い事が勝手に出來て、食い度い物を自在に食べりやア、こんな有難い事わ無いなア。』

と、立ち止まつて嘆息をはじめた。

東一わ愛想を盡かしたが、

『イヤ、よく考えて見るが可い。お前がそんな了簡で居るから、眞個の鬼が好い氣になつて、お前と食競をしに來るのだ。食競と成つた日にやア、とてもお前わ敵うまい。敵わない許りなら可いがしまいにわお前までが鬼の飼食になつてしまう。それが如何にも氣の毒だから、私が是から手傳つて、お前を人間にしてあげようと思うのに、その目がまだ覺めないとわ、何たる情無い事だ！』

と、親切な心があればこそ、勵ます心算で云つてやると、東二わグツと癪にさわつたと見えて、『何だと？　默つて聞いてりやア好い氣になつて、高慢臭い說法をしやがる。高の知れた貧乏人間め、もうお前とわ同伴御免だ！　おいらアやつぱり鬼と一緒に、食い度い物を食う事にするよ。』

と、云いすてゝ又元の所え、どん〳〵歸つて行つてしまつた。

東一わもう一度、引留めて云い聞かそうとしたが、何しろ今も云われた通り、人間わ人間でも、腹が減つてわろくに働けない。實わ自分一人でさえ、思う樣に食べて行かれないのに、この上あんな無藝大食の、厄介者が付き纏つて居れば、果わ共倒れになる他わないと、仕方が無しに手を控えた。

が、目が放さずに見て居ると、東二わ如何にも馬鹿な事をして居る。

まづその大きな體をして、ろくに立つ事も出來ないから、ゴロリと横に成つて、半分わ寢込んで居るが、それで居て口ばかりわ達者に、大きな事を云つて居る。

『世界中で一番豪い人間わ、誰が何と云つたつて、この東二樣だぞよ。みんな此所え來てお辭儀しろ！』

など、太平樂を云うかと思うと、今度わ大聲に、

『ア、、腹が減つた〳〵！　誰か旨い御馳走を、東二樣の所えお供え申せ！　顏髮の一本や二本、爪の垢の二粒三粒わ、御褒美として遣わすぞ。』

と、寢言の樣な事を云う。

その中によく見ると、大きな體の半分にわ、角や毛が生えて居て、まるで鬼の樣になつて居るのに、殘りの半分の方を見ると、其所わまた靑ぶくれた、血の氣の足りない人間の樣に見える。

そしてその鬼の樣な手が、いきなり高く揚つたと思うと、ガンと自分で自分の頭を打つた。

と、今度わ人間の方の手で、其鬼の手を摑もうとする。鬼の手わ摑まれまいとする。擲り合つたり引つ搔き合つたり、果わ兩方とも血塗れになると、其血をさも旨そうに、口をつけて吸つて居る。

東一わとう〳〵見兼ねて、東二を起してやろうとすると、鬼の足わ亂暴にも、いきなり東一を蹴飛ばした。東一わ驚きながら、直ぐにその足を切つてしまおうとしたが、何しろ半分でも人間で居る者を、不具にするのも不憫だと、其足を甚く抑えつけたばかりで、切る事丈わ免してやつた。

けれども元より默つてわ居られない。

『コレ東二！　何うしたんだ？　いかに腹が減つたと云つて、自分で自分の血を吸う奴があるか。』

と、叱りつける樣に云つたが、東二わまだ耳にも入れず。

『余計なお世話だ引込んでろ！』

と、反對に劍突を食わした。

斯うなると流石の東一も、もう腹に据えかねる。いきなり東二の咽喉を締めて、一思いにやろうとすると、後で、

『待つた！』

と、云う聲がした。誰かと思つて振りむくと、それわ兄分の西一でわ無いか。

『留めたのわ君か？』

と、聞くと、

『如何にも僕だ。少し待ちたまえ！』

『だつて此奴があんまり失敬だ。今日ばかりわ勘忍出來ん。』

『その出來ない勘忍を、するが勘忍と云うぢやないか。見たまえ此奴の周圍にわ、あんなに狙つて居る奴があるぜ。』

と、云われて初めて東一わ、四邊を見まわすと、驚いた。

何時の間にやつて來たか、北六はじめ西三や西五、果わ西太までが、目を見張つたり、口を明けたり、爪をならしたり、牙を剝いたりして、自分達を取り卷いて居るのだ。氣の所爲か自分の眼にわ何うしても鬼とより見えない。

東一わギョッとした。

『ヤ、此奴等だ？』

と、云うと、西一わ耳打ちして、

『皆東二を平生から、餌食にしようと狙つてるのだけれども、誰一人思い切つて手を出す者が無いから、それで今まで睨み合になつて、大人しく控えて居たんだ。いまお前が手を出してごらん！それこそ八方から一時に飛び掛かつて、可哀さうにこの東二わ八裂にも十六裂にも成つて、皆の餌食にされてしまう。その時又お前わ、人間だから仲間に入つて、一緒に此奴を食う事わ出來ない。そんな約らん事わ無いぢやないか。それだから私わ留めた。それともお前わ不承知か。』

と、こう云われて見ると、東一も成る程とおもつた。否、一時わ東一もそう云う鬼が大勢居るなら、片端から退治てやり度いと、思わないでも無かつたが、何しろ自分わ腹が空いて居る。まして相手わ大勢だ。なまじ手を出して自分までが、一緒に食われてわ約らないと、それを考えたものだから、此所に止まらずにわ居られない。

て、澁々手を放すと、それを見て覗いて居た鬼共わ、皆咽喉を鳴らした許りで、順々に首を引込ませた。その後で東一わ、グツと東二を引き起し、

『どうだ東二？　これでもまだ目が覺めんか？』

と、云うと、東二わ目をパチ付かせながら、

『ア、、、ア、酷い目に會はすぢやないか、もう少しで死ぬかと思つた。』

『イヤ、決して命わ取らんよ、だが、あんな馬鹿な事を。まだしも相手が私だから可いが、若し他の奴にして見るがいゝ。直ぐにそれを獨鈷にして、お前わ取つて殺されてしまうんだ。それを恐いと思わないのか。』

『ナニ、恐くわない事わないが、何しろこの腹が減つちやア、何うする事も出來ないから、ちつと何か食わしてくれ！』

と、意氣地無く頼むので、東一も亦可哀そうになり、

『それぢやア仕方が無い。おれの辨當を分けてやろう。人間並の食物をやつたら、ちつとわ人間らしく成るだろう。』

云いながら西一の所から、運んで貰つた辨當を、半分わけて食べて、さも有難そうに禮を云つて居る。

五

喉元過ぎれば熱さを忘れる。こうして助けられた時ばかり、東二わ東一を頼もしがつて居た様だ。

所が段々時が經つと、又例の惡い癖が出て來る。それわ自分の軀が大きいものだから、丈の小さな東一に世話に成つて居る事が、何だか極りが惡くてならない。否、只極まりが惡い許りか、——現在幾度も酷い目に會つて居ながら、まだ目がさめないと見えて、なアにおれだつて本氣になつたら、こんな小さな奴に負けるものかと云う氣が、何うしても拔けないからだ。

て、東二わ、少しでも東一の手を弛めると、直ぐ寐返りを打とうとしたり、果わ生意氣にベツカツコなどして、喧嘩を買う樣な眞似をする。

東一わ癪にさわつてたまらない。幾度が拳骨を揚げようとした。と、その度に西一が、横から變な目配せをする。目配せをされると氣が鈍つて、つい手も出せなくなつてしまう。その心外さ、悔しさわ、傍の見る目も氣の毒な位だ。

すると、ある日又東二わ、右の鬼の方の手と、左の人間の方の手とで、例の獨角力を始めた。東一わ氣を揉んで、それを止めにかゝつたが、まづ右の手を抱き止めようとすると、右の手わ振り放して、

『おのれ東一め！　貴樣が第一人間面をしてやがるから、それで人間の手が威張りやがるんだ。』

と、云いながら打つてかゝつた。

『コレ危い！』

と、拂おうとしたが、それでも彈みで鼻柱を打たれて、少し許り鼻血が出た。

佛の顏も三度と云う譬えがある。東一わもう腹を据えかね、

『おのれ生意氣な！』

と、立ちかゝると、又しても近所の鬼が、彼方からも此方からも、ニヨキ〳〵顏を出しかけた。

そして東一が一擊喰わせると、直ぐに八方から飛びかゝつて、東二の手足を食い取ろうとする。

中にわそつと東一に、

『オイ、お前わ遠慮無しに首をお取り！　その代り股わおれが貰うから。』

など〻意地をつける奴もある。

『何だと！　私が東二を酷い目に會わすのわ、眞人間にしよう爲めだ。殺して食つてしまう爲めぢやアないよ。』

と、窘めて云つてやると、急に人間の顏をして、

『そうだ〳〵。全くそうだ。それでなくちやア人間でない。流石にお前わ感心だよ。』

など〻お世辭を云うものだから、折角振りあげた拳骨も、今更持つて行き所が無い。

否、これを振りまわす以上わ、東二を擲つて懲らすよりも、まづその周圍の鬼共を、追拂つてしまう覺悟が要る。所が自分わ小男の上に、平生の食物が足りないから、心わ矢竹にはやつても、息も力も續きそうにない。

と、また悔し涙が、ハラ〳〵と頰に流れて來たが、西一わまた耳の側で、

『コレ、泣くな〳〵！　何も心配する事わ無い。今わまだ時節でないから、今暫時辛抱して、其間によく腹を肥やし、腕を鍛えて置くが可い。』

と、深切に云つてくれる。

『でも西一さん、私ア悔しい。私があんたより大人しくしてると、この東二わ馬鹿にする、他の鬼共わ好い氣になつて、此後又私に向つて、どんな失敬な事するかも知れないから、いつその事思い切つて、私も鬼の氣に成つて、一か撥かやつゝけて見ようよ。』

と、刀を取り直そうとすると、

『まアま、そう思うのわ道理だが、もう一度辛抱しなさい！　なるほどあの東二わ、總身に智慧の廻り兼ねた、解らずやの大白痴だから、世話になつてるお前に對して、却つて仇をする樣だが、他の鬼等わ流石にお前を恐がつてゐるので、まだ遠慮して手を出さないのだ。そしてお前が手を出したら、その尾に付いて旨い汁を、吸わしてもらおうと思つてるんだ。だからお前わ此上とも、十分我慢に我慢をして、一方でわあの東二を、元の人間に引戻し、又一方でわお前自身の、力をつける事にしなさい。そうすれば他の鬼等が、いくら涎を垂らして居たつて、指をさゝせるものぢやア無い。それでも手を出す奴があつたら、此西一が放棄つておくものか、直ぐに行つて引擲いてやる。』

と、言葉を分けて諫めるでわないか。

東一も聞いて見れば、又道理な事ばかりだ。——自分が鬼なら知らぬ事、飽まで人間で行こうと云うにわ、人間同士の共食わ出來ない。それより人間わ人間の食物で、十分力をつけた上、鬼退治

をするのが役目だと、こう考えたものだから、漸く心を押し静め、只東二の鬼の手を、二度と亂暴しない様に、鎖で括りあげておいて、其儘引あげる事にした。けれども例の鬼共が、又東二に暴れさせ度さに、内證で鎖を解かないとも限らないと、東一わ決して油斷わせず、ぢつと東二を睨んで居る。

東二わ只意氣地もなく、

『ア、苦しい〳〵！　誰か何か食わしてくれ！　腹が減つた、腹が減つた。』

と、時々泣きそうな聲を出す。

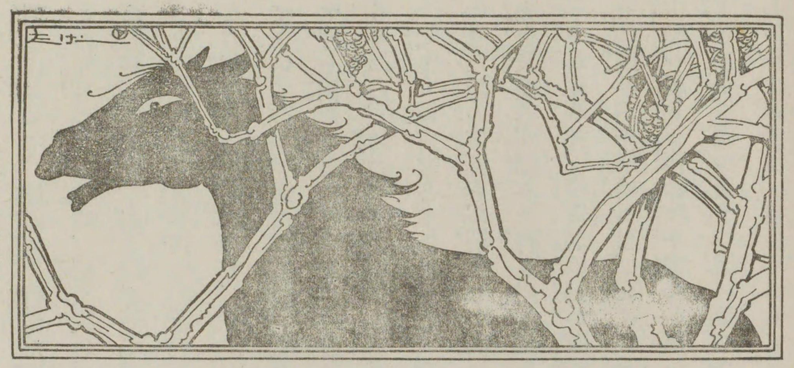
その度に東一わ、いくらか食物をやらないと、直ぐ他の鬼共から、悪い物を食わされるから、無けなしの辨當をわけて、命を繋いでやるせつなさ。

『あゝ厄介な兄弟分だ！』

と、時々わ東一も、心から溜息を吐いて居るけれども、決して見放しわせず、我を忘れて世話をしてやる。

東一が東二を見放さない様に、西一わ又東一を助けて、斷えず心を添えて居る。

若し此後太陽が、再び三角になつて、地球が平つたくなる時が來たら、或わその西一まで、鬼になつてしまうかも知れない。けれども東一わ相變らず、神に似た人間で居るだろう。



剣に代わる木の横着

日取童子

一　剣に代わる木の横着

大むかし、我が天照大神が、荒神の悪戯を嫌わせられて、天の岩戸に隱れたもうた時わ、手力雄命が進みよつて、岩戸の扉を取り退けて、再び此世に日の光を迎えた。それわ日本の話しであるが、何所の國だか知らない。唯ある時ある國に、ある大きな山があつた。

此山の頂邊にわ、照日の鏡と云う、稀代な鏡があつた。これわ日の神の御化身として、此山中を照らして居るが、全くその光で國中が明るくもなれば、また溫かみも受けて居た。

然し何分山わ高し、道わ嶮しくもあるものだから、昔からその

頂邊に登つて、鏡の側え行つた者わ、滅多に無い位であつたのに、ある時大の横着者が出て來て、この照日の鏡の前に、劍を拔いて立ち塞さがり、鏡から出る光と熱とを、其劍にすつかり吸い取つた揚句、更にその劍をかざして、山中の草木共に光明と溫度を配つて、一廉したり顏をして居た。

それでも麓の草木共にわ、高い所の事わ解らない。それで譯の解らぬ連中わ、その鏡の事を忘れ、この劍許りを有難がつて、下から拜んで居たのだが、そんな間違つた馬鹿げた事わ、何時まで續いてよいものか。遂にある時元氣な草木共が、大勢で力を合わせ、その横着な曲者を、寄つてたかつて押し倒し、その手に持つた劍を奪つて、散々に蹈み折つて棄てゝしまつたので、その時からと云うものわ、鏡わ再び光を揚て、直に照らし、親しく溫める樣になつた。

元より鏡を寶とする山なら、その山の草木共わ、鏡の光や溫みを直に受け度いのわ當然の事だ。また鏡の方でも、斯うして高い所から、一目に山中を見渡して、どんな谷蔭や岩間えも、自分の光を及ぼし、溫みを行き渡らせると云う事が、屹度嬉しいに相違ない。

さればこそ、横着者の劍が取拂われ、邪魔な前立が無くなつた時わ、久し振りの故でもあろうが、その溫みが一層增して、更に五筋の光となり、さも鮮かに山中を照らした。實にこの五筋の光わ、山中の者を、何れ程幸福にしたか知れない。それわ他でも無い、此五筋の光を便れば、どんな麓の下草でも、鏡の邊まで這い登ることが出來、また鏡の方からも、この五筋の光を辿つて、どんな卑しい花の影でも、自分で寫して見られるからだ。

山中の喜悅わ、實に一ト通りや二タ通りでわない。まるでこの山に新たに鏡が出來上がつた樣に喜び狂つたその聲わ、遠い天にも聞こえた位であつた。

『どうだイ、豪儀ぢやアないか。おれ達わ今までに、こんな有難い鏡のあることを、ちつとも知らずに居たのだとわ、何と云う迂濶な事だろう。』

『そうよなア。今までわあの劍を、有難い本尊樣だと思つて、ちつとでも伸びようとすると、恐ろしい刄物の威光で、直ぐに上から薙ぎ倒されてしまうのも、仕方が無いと諦めて居たが、考えて見ると馬鹿〳〵しいなア。』

『所が今度わ、何しろ有難いお鏡樣から、直に五筋の御光がさして居る。これからわ此方等わ、あのお光とお熱を受けて、どんなにでも伸び放題、こんなめでたい事わない。』

と、草木の精わよると觸ると、口々にこんな事を云つて、互いに喜び合つて居た。

『何しろこの山に取つてわ、今までに無い大變動だから、その機みで今までの草木の位置が轉倒して、麓の者が頂上え行つて生えたり、谷の蔓草が峰まで伸して、得意になつて芽を吹いたりする。

『オイ〳〵あれを見や。彼所に此頃頭をあげた檜わ、今まで西谷の大岩の蔭に、小さくなつて居たつけが、今度わうまく鏡の前え前て、光をまともに引受けるもんだから、急に葉色がよくなつて來たぜ。』

『それに此方の槐もそうだ。此間までわ小さくなつて、天狗杉の根にはさまれ、ろくに雨にもあ

たらなかつたのが、今ぢやア御光のお庇でもつて、頂邊え枝を伸して來た。』

など、羨ましがる者もある。

こんな有樣で、今までの山の形わ、何うやら變つて來た樣だが、それでもまだ山の上にわ、兎角木ばかり茂つて、草の方わ、物蔭にまわされ、思う樣に伸びられない。これでわ折角の五の御光が出ても、思う樣にわ縋れないと云うので、ある時草の精共がより合い、これからわ草の方も、鏡の近くに生やしてもらい、木と同樣に光を受けようと、こう云う相談をした揚句、鏡にこの事を申出ようとすると、その似前から鏡の前に、根を張つて居た大木共わ、横合から枝を出して、

『イヤ待て〳〵！　お前達わ何と云うのだ。このお山わ照日と云う、有難い鏡のお山だ。その御光の御恩も忘れて、却えて溫みに付け上がり、大それた事を申すと、罰が當つて芽が潰れるぞ。』

と、嚇しつけたが、草の精わ承知しない。

『元より此山わ鏡のお山だ。然しその鏡の御光わ、昔わ知らず此頃でわ、木も草も一樣に、お照らし下ださる筈でわないか。それに木ばかり生い茂つて、草の伸びを邪魔するから、それでこう云う不平が出るのだ。私達が上え出たつて、元より草の事だから、高く伸びても知れたもの、お前さん方わ下に居ても、高く伸びる事が出來るのだから、私達が邪魔にもならず、其所で御光を兩方とも、一緒に受けられる樣になる。――それを木ばかりが鏡樣の近くで大きくなつてしまおうとわ、お前方こそ付け上つて居るのだ。』

と、一本極め返すと、木の方でもムッとして、

『何を小癪な事をぬかす。世が世なら貴樣達わ、唯一ト薙ぎに刈り倒される奴だが……』

『オヽ、劍が光つて居た世なら、なるほど無法に刈られもしよう。然し今わ鏡樣の御代だ、そんな亂暴をやつて見ろ。其の方こそ罰が當るぞ。』

と、果わいがみ合いそうになる。

所え鏡が光をさし込んで、

『まア待て〳〵！　先刻から聞いて居るに、草の申分わ道理な事だ。木も性がちがうと云つて、おなじ此山の植物なら、そう意地惡わ云わぬものぢや。』

『でわ鏡樣にわ、この草共の贔負を遊ばして、近くえお生やし遊ばすのでございますか。』

『イヤ、別に依估や贔負を致さん。木にも草にも平等に、照らし溫めるが私の本意ぢや。然し今から直ぐにと云つてわ、又一騷ぎを起す基ぢやから、草も今一年辛抱せい、その中にわ木の方にも、よく得心が出來ようから、その時わ草共わ、山の上え生えて參れ。木共わまた草に讓つて、少し遠のいて貰おうか。そうすれば雙方に、等しく光を配ばることが出來て、私も滿足が出來ると云うものぢや。』

と、いかにも優しい仲裁に、草も喜んで納得すれば、木も此上の不服わ云えず、それでわ來年の春からと、言葉をつがえて物別れとなつた。

二　風と雲とが產んだ童子

他ならぬ照日の鏡が、親から仲裁してくれたのだから、草の精わ喜んで引取り、その後わ一年の後、望み通り鏡の近くえ、芽を吹き葉を伸ばすことが出來ると、それ許りを樂しみにして居た。

所がまた木の方でわ、今まで鏡の光りや溫みを、近くで占めて居た味わ、今更忘れ度くもないので、何うしてもその位置わ離れ度くない。

そこで仲間で云い合わせて、內々根をからめ合つたり、枝を接ぎ合つたりして、よしんば其場え草が生え込んでも、やつぱり上から葉を茂らせて、鏡の光わ自分の方が、先に吸い取る工夫をして居た。

で、次の春に成ると、約束通り草の仲間わ、麓や谷間から一ト飛びに、頂上の方え生え移つて、鏡に近く位置を占め、ヤレ嬉しやと思つて居たが、それとても暫時の間で、やゝもすれば鏡の光が、思つた程明るく無くなるので、何うしたことかと見上げると、何時の間にか木の仲間が、枝をひろげ葉を茂らせて、自分達の上を掩う樣にして居る。

漸く鏡の近くに出た草でも、こうした目を見るのだもの、まだ麓や谷間に殘つた、他の名も無い草どもわ、却つて前よりも鏡の光に、遠くなつた樣な氣がして、薄暗い所に、うら寒い想をしなければならず、隨つて葉も莖も、漸々光澤を失えば、力も無くなる樣になつた。

『何と云う事だろう。これでわ五筋の御光も、何所え行つてしまつた事やら？　此方等の浮ぶ瀨がありやしない。』

『ほんによ。こんな事ならいつその事、又劍を出してもらつた方が可い。時々わ恐い事があつても、此方が大人しくして居りやア、光りや溫みわあつたものだ。』

『所が今わ大人しくすれば、尙馬鹿にされて蔭えまわされる。こんな約らん事があろうか。』

と、其所此所で愚痴を云う聲がする。

中にわ又悔しがつて、

『これと云うのも木の仲間が、岩木の時分に元氣を以て、あの劍をへし折つたのを、今だに鼻にかけやがつて、鏡を自分達の有の樣に、獨占にするからだ。』

『そうとも〳〵！　おなじ獨占にして居ても、劍わ自分が受賣をしてゐながら、山中を照らしたものだが、あの木の奴等わ腐つても、ポスポル程しか光らんから、山の爲めにも何の爲めにも成らんワ。』

『いつその事、今度わ此の草仲間であの木の奴等を打ち折つてやろうか。とわ云いながら此方等わ何を云うにも草の事で、唯さえ勢の弱い所え、ろくに光も溫みも受けんから、思う樣に働けもせず、此ま丶指を銜えて枯れ果てるのか。何と云う情無い事だ？』

と、切齒して泣く者もある。

けれども木の仲間わ、その弱身につけ込んで、ます〳〵枝葉を蔓こらす許り、果わ肝心の照日の鏡をも、その蔭で包んでしまつて、草仲間にわ毒がある、汚れがあるなどゝ云つてわ、漸々その光を屆かせまいとする。

草仲間わ躍氣となつて。直ちに鏡に迫まろうとするが、何しろ丈が低いので、なか〳〵側えも行かれない。時々わ風の力を借りて、葉を鳴らして騒ぎ立てると、それを蒼蠅いと云わぬ許りに、木の仲間わだしぬけに、葉の間から鏡の光を、一度にさつと浴びせかける。

その光も常から浴び馴て居れば、決して恐くわ思わないが、こうして平生わ隱す樣にして、不意に強く光らせられると、眩ぶしさに目も向けられず、アツと云つて皆默つてしまう。

それを見て木仲間わ、それ見た事かと冷笑つて居るが、後にわこれを好い事にして、何でも草共を威かすのわ、光と熱とをためておいて、一度に眞向から浴びせるに限る。それにわ鏡を成る丈奥深くおいて、常にわ草共の目の屆かぬ樣に勿體付けておくが一番と、枝わいよ〳〵細かに、葉わますす〳〵茂らせる。

こんな風で可哀そうに、草わ鏡との間を漸々遠く隔てられる許り、隨つて、光も受けねば、溫みも浴びられないから、葉わ凋れ、莖わ萎えて、やがてこの山に、草の種が盡きわしまいかと云う、淺ましい有樣になつて來た。時此時、此草仲間の味方になつて、突如として現われた者がある。それわ天と地とを父に、風と雲とを母にして、此山の麓に生れた、獨童子と云う者であつた。金太郎でさえ、山姥と云う母があるのに、此者わ人間の親を持たず、兄弟とても無い者であるから、誰云うとなく獨童子と呼んで居たが、生れ付いての元氣者で、常々この山を遊び所と定め、或る時わ鷲の背に乘つて、雲間から頂を見おろしたり、ある時わ熊の肩に跨つて、谷川の源を究めたりして、これを無上の樂みにして居たが、ある日遊びにも疲れたと見えて、只ある山蔭の岩を枕に、しばらく横に成つて休んで居た。

すると其枕邊で、何だか話し聲がして、

『何だ〳〵、此所に居るのわ？』

『いつもの童子らしいぢやないか。』

『そんなら人間だネ。』

『人間なら萬物の靈だ。』

『そんなら智慧も力もあろう。』

『一つ此人に賴んで見ようか。』

などゝ相談する樣子だ。

童子わ閉つた目を細くあけて、その聲の方を見ると、これわ萠黄の筒袖を着て、蒼白い顏をした痩せこけた小人の群である。

『ハテ、妙な奴だな。』

と、口の中に呟きながらも、また眠つた風をして居ると、

『しかしまだ子供の様だぞ。そんな事が出來るか知らん？』

『子供だつて人間わ人間だ。おれ達よりわ大きいぜ。』

『それに他の子供の様に、おれ達をやたらむしつたり、摘んだり、ちぎつたりしない所を見ると、屹度良い子供に相違無い。』

『何しろ寢てちやア仕方が無いから一つ起こして聞いて見よう。』

と、云う中に何者か、鼻の孔を擽ぐるので、童子わたまらず、

『ハクション！』

大きな嚏を一つして、其儘起き直りながら、

『誰だイ〳〵！　惡戯するのわ？』

と、四邊を見まわすと、小人共わ其前に、一列に平伏しながら、

『これわ童子樣、御休息の所をお邪魔致しまして、まことに相濟みません。』

『然しこれも私共が、たつてお願い申度い事があるのでございますから、何卒御勘辨遊ばして下ださいまし！』

と、云う。

童子わ一同を見まわして、

『何奴も此奴もおんなじ樣に、青い顏した痩蟲の樣だな。全體貴樣達わ何者だ？』

『ヘイ〳〵、何も私共だつて、初めからこの樣な、青しよびれた痩蟲ぢやございません。元わこれでもつや〳〵した、元氣のよい若草でございました。』

『ナニ、若草だと？』

『ヘイ、皆この山の草の精でございますが、鏡の光をうけない許りに、こんなヒヨロ〳〵した痩草になつてしまいました。』

『何だつて鏡の光をうけないんだ？』

『うけないのでわございません。受けられないのでございます。』

『そりやア又何うしてだ？』

『聞いて下ださいまし。こう云う譯でございます。』

と、これから鏡の五筋の光を、今でわ木仲間に遮られて、自分達わ光も溫みも、今でわ所詮受けられず、此分でわこの山わ、遠からず木山になつて、草わ殘らず絕えてしまうと、苦しい有樣を委しく話し、

『就きましてわ童子樣、私共を不憫に思召し、何卒あの木の仲間から、鏡をお取り返し下ださいまし！』

と、頼んだ。

童子わぢつと聞いて居たが、

『それでわ、お前達わ鏡を取り返して、是からわこの山を、すつかり草山にしようと云うのか？』

と、念を押すと、草の精わ手を振つて、

『イエ〳〵、決してそう云う譯でわございません。只初めの約束通り、草を鏡樣の側において、木と同樣に照らされもし、溫められもする事が出來れば、それで宜しいのでございます……』

『何分にも只今でわ、木許りがあの鏡樣を、獨占にして居りますので、私共がこの通り難儀をするのでございます。』

と、云うと童子わ點頭いて、

『ウン、よし、それで解つた。なるほどこの山の草や木わ、等しく照日の鏡をうけて、育ちも伸びもして居るのだ。さればこの山わ草木の山で、鏡わ木ばかりの鏡でわあるまい。そう云う事ならこれから行つて、一つ木共に云い聞かせて、その不心得を直してやろう。お前達も安心するが可い。』

と、頼もしくも請合つた。草の精わその言葉に、旱に雲を見る樣に、皆等しく喜んで、

『何卒何分お願い申します。』

と、又しても地え頭をすりつけると、其儘姿わ見えなくなつたが、後で其邊を見ると、草わ成る程生えてわ居るが、皆葉先が凋れかえつて、莖も枯れ〳〵に成つて居る。

これと云うのも此山わ、木ばかり上に茂り合つて、草に鏡の光を見せぬからだ。よし、木共に談判して、草を助けてやらねばなるまいと、童子わ立ち上つて、山の上えと志した。

三　木の精の傍若無人

一

豐山と云うものわ、麓の方にこそ木わ茂れ、高く成ればなるほど、その木も丈を縮ませて、果わ草許りになつて了うのが常だ。

それにこの山わ、丁度それと反對で、下の方わ草が生え、上え行くほど木が茂つて、その頂上わ一段と木深く、照日の鏡わありながら、爲めに光も洩れて來ない位だ。

さてこそ横着な木共めと、獨童子わ木立え分け入つて、木の精に會おうとしたが、其邊に姿も見せて居ない。

仕方が無いから足をあげて、最寄の木の根を踏み鳴らしながら、

『コリア〳〵木の精、一寸來い！　話があるから出て來いよ！』

と、云うと、オウと何所でか聲がして、ヒヨツコリ前に現われたのわ、これも崩黄の着物でわあるが、袖わ廣く裳も長く、而も顏わ圓々として、腹も太げな若者であつた。

『貴樣わ木の精か？』

『如何にも木の精だが、何の用だ？』

と、言葉遣も横柄だ。

獨童子わ睨めつけながら、

『木の精なら云つて聞かす事がある。全體この山の照日の鏡わ、草木を等しく照らすべきものだぞ。それに木ばかりが獨占して、草に光りを屆かせぬとわ、甚だ宜しくない事だ。今日からわ改めて、草を鏡の側えまわし、自分達と同じ樣に、鏡の光を受けさせてやれ！』

木の精わサラ〳〵と笑いながら、

『何の用だと思つたら、そんな下だらない話なのか。いかにも鏡わ草と木が、一緒に照らされる筈のものだ。だから見なさいこの邊にだつて、草わいくらも生えてるぢやないか。それがお前にわ見えないのかエ。』

と、云う。云われて又見直すと、成る程草も無くも無いけれども、此邊に生えて居る草わ、麓に生えて居る草よりも、もつと元氣が無くなつて居る。それと云うのも此邊でわ、木が幅を利かして居るので、その蔭に皆小さくなつて、殘りの雨露を貰い度さに、今わ反抗う氣力も無いのだ。

童子わ此體を見ると、一層氣の毒に思い、

『いかにも此邊にだつて草わある。然し折角側まで來ても、鏡わお前達で取り込んで、ろくに光を分けてやらないから、此通り皆弱つてるぢやないか。』

『その弱るのわ此方の知つた事ぢやない。草の丈が短いから、鏡樣の光があつても、自分で受ける事が出來ない迄だ。』

『さ、それだから草にでも、その光の受けられる樣に、お前達が除けてやるが可いぢやないか。』

『そんな事が出來るものか。おれ達わ鏡樣のお思召で、こうして側に置かれて居るのだぞ。それを草の分際として、無理に割り込んで生えようとするから、こんな始末になつたのだ。云わば自業自得と云うものよ。お前さんも餘計なお世話を燒かないで、それほど草が好きならば、序に此邊の草を拔いて、きれいに引取つてもらいましようかネ。』

と、果わ嘲る樣に云つて、其儘行つてしまうおうとする。

童子わ又呼び止めて、

『コリヤ待て〳〵！』

『待てとわまだ用があるのか？』

『これほど云つて聞かせても、貴樣等わおれの云う事を聞かんな？』

『アハ、、、、その事ならば氣の毒だが、私等の知つた事ぢやない。』

『貴樣の知つた事でなくば、これから鏡の所え行つて、直談判をするがよいか？』

『ナニ、鏡樣の所えだと？……行けるものなら行つて見るがいゝ。』

『オ、、いけなくツて何うするものか。』

と、獨童子わ腹立まざれに、大手を振つて通ろうとすると、こわ如何に今までの木の精わ、見る

見る大木の正體を現わして、行く手の方に立ち塞がり、右を通ろうとすれば、右え枝を出し、左え脱けようとすれば、左え根を張り、何うしても前え進ませない。

その中にわ山中の木が、一時に戰ぎ初めたと思うと、枯枝を吹き立てたり、木實を降りかけたりして、童子一人を脅めようとする。

童子も元より負けぬ魂、かうされゝば猶の事、この木立を薙ぎ倒し、踏み折つても通ろうとしたが、それでわ却つて此山を騒がし、此邊に混つて生えて居る、草の仲間にも怪我が出來ると、こう思い直したので、無念とわ思いながら、一トまづ其所を引返えすと、木立わさも勝ち誇つた樣に、傍若無人の高聲をあげて、ドツと鬨を作つて居る。

四　風の神も照日の味方

途中まで引返した獨童子、此聲を聞くと立止まつて、又振りむいてキツと睨め付け、

『よし、今に思い知らすぞ。』

と、云いながら又天を仰いだが、小手を高くさしあげて、

『丸よ〳〵！』

と、呼ぶと見えたら、忽ちサツと羽音がして一羽の鷲が舞い下がつた。

童子わ直ぐにその背に乘つて、再び空え飛び揚がり、上から山の頂上の、鏡を見おろそうとするのに、此所も今わ老木の葉で、深く閉ざしてしまつたから、鏡の所在さえ解らない。

『おのれ横着な木の奴等め！　此上わ目に物見せてくれるぞ。』

と、云いながら又空に向つて、高く〳〵舞い上つたと思うと、兩の手を捧げて、

『お母樣！　〳〵！』

と、二聲許り高く呼んだ。

すると忽ち其前え、風の神が雲に乘つて出て來た。

『オヽ、お母樣！』

『獨童子よ、何か用か？』

『お願いですから今直ぐに、袋にある丈の風を出して、あの山の木を片端から、吹き折り吹き倒してやつて下ださい！』

と、云う。風の神わ驚いて、

『私わ五日目に一度吹いて、十日目に雨を呼ぶのが、昔から役目と極つて居る、お前なんぞが頼んだとて、時ならぬのにその樣な、暴風を起す事わ出來ない。』

『いゝえ、阿母さま！　貴女わ時ならぬと被仰いますが、今がその時でなくて、どうしてこんな時がありましよう。』

『どうしてまたお前わ、そんな事をお云いなのだ。』

『貴女わ何も御存じない。又私だつて、今日はじめて知つたのですが、御覽なさい、ある山わ照日の鏡の山ですが、今でわその鏡の光も、まるで見えなくなつてしまいました。』

『オ、そう云えば此間から、鏡わ何うしたかと思つて居たよ。』

『それわ皆あの大木共が、自分達丈で光を占め、草にわ溫みもあてないからです。それで可哀そうに草共わ、もう枯れそうに成つて居ます。ですから私が木の精に、光をわけろと談判したら、私の云う事を聞かない許りか、却つて私を馬鹿にして、いろんな失敬な事を云うぢやありませんか。もう勘辨が出來ませんから、これからあの木立の奴等を、片端から吹き飛ばして、あの山を草山にしてやろうと思うんです。何卒お母さま手を貸して下ださい！』

と、如何にも熱心に賴み込む。

風の神も聞いて見れば、如何にも面憎い木共の振舞、目に物見せてやり度くわある、然しうつかり手を出して、肝心の鏡に瑕でも付けてわ、何の役にも立たないと思つた。それにわあの鏡の所え、誰か使の者をやつて、豫め斷つておき度いものだと、それを考えて居る所え、一羽の烏が通りかゝつた。

烏わ日の神の家來だと云う。それなら照日の鏡の所えも丁度好い使者であると、呼び止めて譯を話し、御苦勞だがあの山の、鏡の所え直ぐに行つて、

『是から暴風を吹かせますが、しばらくの間面をかくして、見ない風をして居て下ださいまし！』

と、かう云う事を云い込ませた。

烏わ心得て飛んで行つたが、程無く歸つて來た時に聞くと、

『それわ賴んでもやつて貰いたい事だ。實わ此頃の樣に大木どもが茂り過ぎてわ、折角の五筋の光も、皆途中で遮ぎられて、自分で山を持ちながら、山中を照らすことわさておき、見渡す事さえ出來ないで、當惑して居る所だから、何卒はやく吹き拂つて欲しい。』

『私もそう云う目ざましい仕事わ、除けずに見物して居たいから。』

と、こう云う鏡の返事でわないか。

この上わ何の遠慮が要ろう。

『ソレやつゝけろ！』

と、云うと童子わ風の神と一緒に、再び山の上えと來た。

五　明るい溫い草木の山

山でわ勝ち誇つた木の仲間が、彌が上にも枝を張り、嵩にかゝつて葉を茂らせ、さしもの照日の鏡さえ、今わ何所にあるのやら、所在の解らぬまで蔽いかぶさり、深くも包み込んで居る。

『どうです阿母さま！　あんな勝手な事をされて、默つて見て居られますか。』

と、童子が憎そうに指して云えば、風の神も眉を寄せて、

『成るほどこれわ怪しからん。私も今までわこの山の、鏡に雲のかゝらぬように、時々吹きに來たことわあるが、立木の邪魔を拂わねばならぬ、間違つた時節が來ようとわ、今が今まで氣が付かなかつた。然しいくら茂つても、高が立木わ地上の物、この天上の風に會つてわ、唯の一トたまりもあるまいぞ。』

と、やがて風袋に手をかけると　一緒について來た以前の烏が、

『イヤ然し風の神様！　天上の物と云えば、照日の鏡わ日の神の化身、それに御怪我の無い様に、よく氣をつけて吹いて下ださいまし！』

『それわ私も承知して居る。だがその鏡わ、何の見當にあるのだネ。』

『それわあの山の中でも、一番高く頭を出して居る、あの大杉の蔭にあるのです。』

と、云う時、獨童子も進み出て、

『事によるとその大杉奴が、何所までも鏡を放すまいと、根でからめて居るかも知れない。よしそれならば、私が一番飛び込んで、最初に鏡を取りましよう。そうして木の奴等めが、驚いて取り返そうとする所を、一氣に吹き飛ばしておやんなさい！』

『オヽ、それが上策だ。』

と、こゝで手筈が極まつたから、童子わ鷲の背を離れたと見る間に、はやくも大杉の梢に飛び移つたが、そのまゝスル〳〵と幹をすべつて、根元の方えと降りて來た。

見ると其根方にわ、照日の鏡が置いてある。けれどもその面わ、枝葉の蔭になつて居るので、前の様に光わ放たず、その裏の方にわ、木から落ちた雫の業か、青い苔さえ生えかけて居る。

その淺ましい有様に、童子わ思わず涙組んだが、心弱くてわなるまいと、氣を取り直して進みより、

『天と地とを父とし、風と雲とを母とした、この獨童子めが、照日の鏡を受取りに參つたぞ。』

と、云うよりはやく手をかけて、エイと許りに抱えようとすると、忽ち後から躍りかゝつて、

『曲者！』

と、組みつく者がある。

『曲者とわ何方の事だ？』

と、云いながらふり向くと、これぞ先刻も高言を吐いた、木の精の若者だ。

『おのれ小癪な木葉小僧！　もう邪魔させてわ置かんぞ。』

と、云いながら振りほどき、再び向つて來る所を、足をあげてウンと蹴ると、二三間彼方え跳ね飛んでしまつた。

すると又後から、矢庭にからみ付く者がある。何かと思つてよく見ると、これわ大杉の枝から下がつた、太い藤の蔓であつた。と思うと足許から脛を拂つて來る者がある。それわ大杉の根に生え

た、下艸代りの茨である。

小面倒な奴等めと、童子わ蔓を引きちぎり、茨を踏み敷き踏み挫いて、再び鏡に手をかけると、今度わ大杉が動き出して、その鏡を幹でかばい、何でも渡すまいとする。

それにも怯まず獨童子わ、金剛力を兩手に込めて、その大杉の幹に手をかけ、ユッサ〳〵と搖り立て揉み立て、半時ばかり闘う中に、流石の大杉も根がゆるんで、少し斜めに傾いて來た。

此時まで風の神わ、雲の間から覗いて居たが、時分わよしと思つたか、袋の口を一度に明けて、溜めに溜めた大風を、ドッと許りに吹き當てると、唯さえ根の緩んで居る所え、又大風を食つたから堪らない、見る〳〵中に大杉わ、メリ〳〵〳〵と凄まじく呻いて、横倒して轉げてしまつた。

その隙に童子わ、はやくも鏡を小脇に抱いて、ヒラリと空え飛び退くと、それ遣つてわと以前の木の精、又起き直つて立ち塞がる。

性も懲も無い奴だと、童子わ眞向から撲ちのめそうとしたが、その時不思議や鏡の面から、電光の樣な鋭い光が、サッとほとばしつたと思うと、木の精わ目が眩んで、バッタリ其所に倒れたまゝ、もう起きも上れない。

此時風わいよ〳〵強く、山の木立を吹きまわると、今までさしも我物顔に、空を凌ぎ山を蔽つて居た、榎、槐、欅、柏、椎、檜の大木共わ、枝を裂かれ、幹を折られ、ヒユウ〳〵と悲鳴をあげ、ピシリ〳〵と泣き吼んで、其所にも横さまに押し倒され、此所にも仰向に根こぎにされ、目も當てられぬ態となつて、物の一時間も經たぬ間に、もうこの山にわ木らしい木の、唯の一本も立たなくなつてしまつた。

こうなるとまた照日の鏡わ、周圍の邪魔が無くなつたので、さも嬉し氣に照り初めながら、

『獨童子！　有難う！　風の神にも禮を云います。お前方のお庇を以て、初めて鏡わ鏡の樣な光を放つことが出來て、こんな嬉しい事わ無い。』

と、云うかと思うとその面から、鮮かな五筋の光が出て、山の頂邊から麓まで、殘る隈なく照り渡つた。

するとその光を辿つて、彼方の谷間から來るわ〳〵、草の精共が群を作つて登つて來る。

其時見ると草の精共わ、鏡の光をまともに受け、溫みを十分に浴びて居るので、澤も好ければ勢も出て、皆活々と勇み立つて居る。

獨童子わ改めて、照日の鏡を頂上に置き直し、さて草の精共に向つて、

『何うだ草仲間！　これでお前の望みも叶つたろう。』

と、云うと、草仲間わ一齊に、其前に平伏して、

『あゝ有難い童子樣！　貴君樣のお庇を持ちまして、この山わこれからわ、何時も明るい、溫い、好い草山に成りますでございます。こんな芽出度い事わございません。それにしても貴君樣わ、よくもあの大木の中から、鏡をお取り出し下ださいました。あの大昔天の岩屋で、天照大神をお引出

しになつた、手力雄命のような、お豪いお方でございます。就きましてわ今日から、貴君様のお名前の、獨童子と被仰いますのを、日を取る童子と書きまして、長く私共の山の、鏡のお守護を願い度うございます。』

と、云う。

童子わ點頭いて、

『なるほど照日のあの鏡を、取り返してやつたから、それで日取童子わ可かろう。だが草共！　今のお前達の言葉の中に、これからわ此山わ、明るくて溫い、よい草山と云つた様だが、それでわまたお前達許りで、その鏡を獨占にする氣か？』

『イエ、なにそう云う譯でわございません。』

『そんなら木の仲間も、大人しくするならば鏡をわけてやる様にしろ！』

『それわ初めの約束通り、素直に光を分けて居りますなら、なんで故障をなしましよう。』

『よし、それでわ改めて、こゝで木の精と草の精が、めで度く仲直をするがよかろう。』

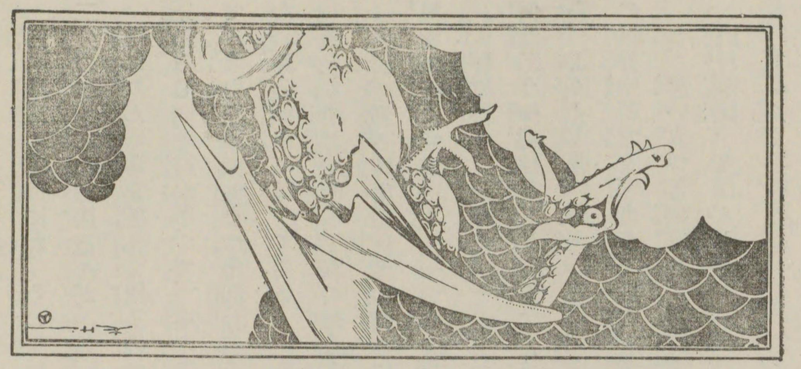
と、先刻鏡の光に打たれて、一旦氣絶した木の精を、再び起して息を吹き返えさせ、草の精と手を握らせて、其中央に童子が立ち、

『天と地とを父とし、風と雲とを母とした、この日取童子が證人に成つて、今この照日の鏡の前で、堅く盟を結ばせる。即ちこの照日の山わ、草と木との山である。照日の鏡わ、草と木との鏡である。就いてわ今日から低い草わ峰に生え、高い木わ麓に茂つて、雙方とも平等に、鏡の光を受けるがよい。鏡の溫みを受けるがよい。』

と、さも嚴かに云い渡した。

それを聞いて照日の鏡わ、さも滿足した様に、溫い光を放つと、風の神も喜んで、以前の烏を連れながら、再び天え戻つて行つた。

照日の山わ此時から、草木が仲よく生い茂つて、世界中に又と無い、好い〳〵好い山に成つたと云う。



大勝魔神

一

試みに飛行機に乗つて、上から世界を見おろして見たまえ！　地にわ山や谷があつて、盛んに凸凹して居るが、水にわ波がある許りで、何所までも平に成つて居る。

所がその凹凹の地わ、山や谷が起伏して、丁度波の様な形をして居ながら、その波わ少しも動かないが、平に見えて居る水の面わ、時として非常な大波を立てゝ、却つて恐ろしい山や谷を現わす。所詮地わ一寸見ると動いて居る様な狀で、その實わぢつと落着いて居るのに、水わ表面が平に見えて居て、その實わ斷えず動いて居る。油斷の成らないのわ寧ろ水だ。

而も地球の表面にわ、その見かけによらない、おとなしい地よりも、食わせ物のこの水の方が、三分の二を占めて居るのだから、油斷のならない話でわないか。

常にこんな事を考えて居るのわ、東勝夫と云う少年であつた。勝夫わ又考えた。尤も昔から、隨分恐ろしい地震があつて、地の非常に動いた事もある。然しいくら大きな地震でも、地が押し出して、水を埋めてしまつた例わすくないが、その代り大洪水で山を崩し、地を押し流してしまつた話わ、隨分澤山に殘つて居る。それだから水の力わ遙かに地の力より恐るべきものだ。と。

勝夫わ殆ど病的に、水の恐ろしさを信じて居た。

所が、ある時ある所での話しに、大勝山の魔神の池わ、いつも鏡の樣に澄みきつて、何樣な大暴風雨の時にでも、小波一つ立つた事わ無い。これわ正しく大勝魔神の、神慮の有難い所だと聞いた。

『大勝魔神！　そうだ、その名わ聞いて居たが、まだお詣りした事わない。全體何う云う神樣で、何う云う御利益があるのだろう。あの横着な、鎭まり嫌いの水が、そうして動かないと云う程なら、よく〳〵強い所があるに相違無い。事によつたらその神樣に、おれも一つ信心をして、何卒あの世界中の水を、もう二度とわ波立たない樣に、お願い申す事としよう。』

と、思い立つと躊躇わず、勝夫わある日支度をして、大勝山えと志した。

山わ海拔千九百メートル餘り、東口から登つて行くと、二千六百尺許りだと云うが、何方にしてもあまり高くないのに、その道の險しさわ、あらゆる山と云う山の難所を、一つに此所え集めたかと、思われる位、幾度か息を切らして、中途からもう引かえそうかと思つた。

けれどもまたその山の不思議わ、一歩でも前え登つたら、もう半足も退かれないほど、後の道がまるで無くなつてしまう。

勝夫わ所謂る騎虎の勢い、今わ命懸けになつて、岩角にすがり、木根を蹈み締めて登つて行くと、漸うの事で頂上え來た。

頂上わまた思いの外平で、そして中央の木立の間に、嚴めしい社が建つて居る。それが大勝魔神の宮だ。

勝夫わまづ手水をつかい、汗を拭いて身を清めてから、正面の神殿え來て、丁寧に額をつけ、

『さて大勝魔神樣！　私わ東勝夫と申しまして、今日初めてお參りに參つた者でございます。付きましてわ、貴神にいろ〳〵御願いがあるのですが、その前に魔神樣！　一つ伺い度い事があるのでございます。』

と、まるで先生に質問でもする樣だ。

『その御尋問わ他でもございません。全體貴神わ何の神樣でございます？　大勝魔神と云うお名前で見ると、何だか軍神の樣でもありますが、お池の水が動かないと云う所を見ると、又平和の神樣かとも思われます。軍神なら私わ別に何の御願いもございませんが、平和の神樣で居らつしやるなら、一つお願い申し度い事があるのです。ですから何卒魔神樣！　其所をよく御聞かせなすつて下

ださい！』

と、眞顏になつて問いかけた。

所が神殿わ靜まりかえつて、御幣の搖れる音も聞えない。額越しに覗いて見ると、正面にわ大きな神鏡が、滿月の樣に輝いて居るが、それに何の寫る影もない。

勝夫わ少し拍子が拔けた。が、又考え直して、一體神樣と云うものわ、妙に夢枕がお好きで、起きて居る者にわお會にならないが、寢て居るとよく御出になつて、夢の間にお詫を下ださるものだからこのお返事も、起きて居てわ聞かれまい。一つおれも寢てやろうと、やがてその階段を枕に、コロリと横になつて見ると、先刻からの途中の疲勞で、直ぐにもぐつすり寢てしまつた。

四邊わます〳〵靜まり返つて、只神木の梢を渡る風が、人の子の小さい鼾に、時々調子を合せる許りである。

その中に正面の神鏡が、怪しく光つたと思うと、其方から太い朗らかな聲が、寢て居る勝夫の鼓膜を叩いた。

『善哉々々！　汝勝夫ようこそ參つた。そしてまた初めから、ようこそおれの本性を尋ねた。その志の健げさにめんじて、今こそ問いに答えるぞよ。――如何にもおれわ軍神ぢやが、又同時に平和の神ぢやと、是許りでわ解るまいが、戰爭をするのわ平和の爲め、平和の爲めにわ戰爭をも、餘儀無くせねばならぬ事のあるのわ、昔から幾度も繰り返した、人の世の例でわあるまいか。譬えば往來の普請をするのにわ、地を掘覆して往來を止めるが、その通さぬわ通そうために、暫時の不便を忍ばしめるまでぢや。また家々の大掃除に、疊を起し、健具を外づすわ、やがてその家を清らにかして、住心地よくする爲めばかりぢや。腫出物を癒すにわ、外科の手術で切り取るが一番。大暴風雨の吹いた後わ、屹度カラリと晴れる道理。戰爭の後に平和が來て、平和の前に戰爭のあるのわ、免れぬ所と思わにやなるまい。それぢやからこそこの魔神わ、戰爭の時にわ荒神となつて、勝負を捌く事を司り、又其後わ優神となつて、平和の爲めに功德を施す。何うぢやこれで解つたか。』

と、云い了つて又聲わ消えた。

聞き了ると又勝夫わ、夢から覺めて起き上つたが、その言葉わあり〳〵と、耳に刻み込まれて居るので、一と通りわ腑に落ちた。

けれどもあの池の水が、始終動かずに居ると云う事、それが序に尋ね度かつたのだが、殘念ながら聞き落した。

然し此上わ論より證據、その池の樣子を見た上、いよ〳〵利益が解つたら、その時改めて信心しても、別に遲い事もあるまいと、勝夫わまた神前に額づき、

『只今わ御丁寧にお答え下ださいまして、まことに有難うございました。付きましてわ、只今一寸お池を拜見して參りまして、それから又お參りに參ります。』

と、云いすてゝ立ち立つたが、何でも此道に相違ないと、社の横手を廻わつて行つたら、忽ちに

銀箔を敷いた様な物が、木立を透して目を射つた。それが魔神の池である。

二

池わさまで廣くない。一方の岸に立つて見ると、四面の岸わ隈なく見える。

が、その岸にわ、葭蘆の生い茂つた所もあれば、岩石の重り合つた所もあり、切り立つた様な絶壁もあれば、辷り込んだ様な砂場もあり、老木の森々と、影を寫した所もあれば、若草の嫋々と、汀を彩つて居る所もある。その變化の多い景色に、勝夫わ一寸見惚れて居たが、それより も肝腎の、動かぬ水の澄み工合わと、更に池の面を見ると、何さまこれわ硝子張の様に、底の藻草まで見すかせて、上の水わゆつたりともしない。

『なる程！』

と、勝夫わ思わず感歎した。

すると、やがて葭の蔭から、一人の女が現われた。

髪わ自然のまゝ後え垂らし、身に靄の様な薄衣をまとうた許りて、足わ素足のまゝであるが、勝夫を見ると笑いかけて、

『まア 珍い！ 貴君此所え何しに來たの？』

と、聞く。

勝夫わ一寸差んだが、何も隠す事わないと、

『魔神様えお參りに來たのです。』

『まア、それにしちやア貴君まだ子供ネ。大きくなつたら軍人になる氣？』

『いゝえそう云う譯ぢやないんです。』

『でわ何う云う譯で？』

『私……このお池を見に來たんです。』

『このお池を……この景色を？』

『いゝえ、この水をです。』

『まアこの水を？』

『えゝ！』

『まア頼もしい。昔から隨分こゝえ來る人わあるが、みんな魔神様をつかまえて、何卒戰に勝たして下ださいましと、自分勝手なお願いをするのか、この池の景色を眺めて、アゝ庭に欲しいなどゝ途方もない望みを起す許りで、わざ〳〵この水を見るなんて人わ、まだ一人もありませんでしたよ。それに貴君わ、まだその通り年も行かないのに、只この水許りを見ようと云うのわ、ほんとに感心な心掛けですこと！ ですが貴君にわ、何うしてこの水が面白いのです？』

と、やゝ改まつて聞かれるので、勝夫も思つた通り、

『一體水と云う物わ、表面わ靜かに見えて居ても、暴れ出すと大變な惡戯をする、油斷のならない横着者ですのに、このお池の水許りわ、どんなに風が吹き荒ても、小波一つ立てないと云いますから、それが眞實なら感心なものだと、それを見屆けに來たのです。』

と、正直に云つて退けた。

すると女わ頷いて、

『そう、それなら何を隱しましよう。私わこの池の水の精で、この葭の岸を守つて居る者ですが、まだ此の他に私の仲間が、岩の岸や、森の岸や草の岸や砂の岸や、崖の岸や、それ〴〵別れ〳〵になつて、一緒にこの池を守つて居るのです。貴君の心掛けが賴もしいから、今一同を呼び出して、貴君に御紹介せしましようネ。』

と、云いながら小手をあげて、

『皆さん！　珍しいお客樣が入らしつたの。はやく御挨拶に來て下ださい！』

と、涼しい聲を振り立てたら、隣の砂の岸からも、彼方の岩の岸からも、また草の岸からも、一人づゝ女が現われて來たが、それが皆前の通り、何れも裸に薄衣をまとうてちらし髪の素足の者許り、水の精とわ聞いて居るが、却つて天人とでも云い度い位だ。その中にこの女共わ、皆勝夫の前え來て、

『私わ森の岸の守神。』

『私わ草の岸の守神。』

『岩の岸にも私が居るのです。』

『砂の岸にわ私が居ります。』

『私わ崖の岸の者！』

と、代る〳〵名乘るのを、此方わ只好い加減に、會釋を返して居る許り、何れも一樣に見えてならない。

新たに來た水の精達わ、前の女に仔細を聞くと、皆賴もしそうに勝夫を取りまいたが、又一人わ問い出した。

『それぢやア貴君わ、水の動かないのが好きなのですネ？』

『動かないにも程度がありましよう。あまり暴れて山を崩したり、家を流したりするのが嫌いなのです。』

『すると貴君わ平和好きなのネ。』

『それわ平和が一番です。水でも平和に澄んで居れば、月も影を宿すぢやありませんか。波を立てゝ騷ぐ水にわ、雲も顏を寫しませんもの。』

『まア面白い、その言葉！　丁度私達の思つてる通りだワ。』

と、水の精わ互いに顏見合せて、さも得意氣に笑を交わした。

こうなると勝夫も、やゝ度胸が据つて來たから、今度わ此方からも聞いて見た。

『一體お前さん方わ、この水の精と云うが、それぢやア始終此所に居て、何樣な事をして居るんですか？』

すると又一人が答えて、

『私達の用と云うのわ、毎日此所のお池の面で、魔神樣の德を唱つて、水鎭の舞をまうのです。それでその舞を舞う時わ、魔神樣が御覽に入らつしやるが、その時わ魔神樣も、全く平和の神樣で入らつしやるから、そのお優さしい平和な顏が、池の鏡に寫つて見える。あゝあの時の有難さを、人間達に見せたならば、誰も二度とわこの神樣に、戰爭の事など願いに來まいに、今までに一人だつて、それを見ようとした者がない。それにお前さんわ、心掛けの好い人だけに、ほんとに好い時に來なすつた。今にもう日が暮れて、大魔が時と云うのが來たら、その舞が始まるから、是非見て行つたらよいでしよう。』

と、云う。

勝夫わ聞いて大いに喜んだ。

『ナニ、水の精の水鎭の舞？　そりやア是非拜見させて下ださい！』

『アゝ見せてあげようとも、その代り斷つておくが、その舞を見る時わ、其方も不動の姿勢をとつて、たとい何樣な事があつても、決して聲を立てたり、手を出したりしてわ成らない。それだけわよく守つて居るんですよ。』

『ハイ大人しくして拜見します。』

『だがそれを見るにわ、此所より彼方の岩の上が可い。彼所に居て池の上を、ぢつと眺めて居る中に、時刻が來れば屹度はじまるから。』

と、一人が案内してくれるので、勝夫わ岩の岸え來て、其所の一番高い所に、蹲まつて待つ事にした。

『さ、それでよい、〳〵。』

『でわ私達支度をしましよう。』

『それでわ又後に！』

と、言葉を殘すと水の精達わ、或いわ葭原、森の中、絕壁の上、岩の影と、持場々々に歸つたと思うと、其まゝ姿わ見えなくなつてしまつた。

三

岩の上に構えた勝夫わ、舞の時刻を待つて居る。その時刻わ大魔が時、なるほど魔神の出そうな時刻、だがまだ間があるか知らぬと、頭をあげて空合を見ると、日わもう西山に傾いて、塒え急ぐ鳥が二三羽、森の梢を掠めて行く。

その梢から吹きおろして、サツと渡つた夕風に、葭の葉わ戰いだが、なるほど池の面にわ、皺一筋もよらばこそ！

その中に夕映の雲も、次第に色を鈍らせて、四邊がどんより影つて來ると、木立の中からか池の底からか、風の音とも思われず、又水の聲ともなく、怪しい鳴りが耳を襲うて居たが、それが次第に明かになつて、果わ歌だと解るにつれて、先刻見えた水の精の姿も、さながら幻燈の人の樣に、池の上え浮んで見えた。

水鎭の歌

一、みイづよ、水よ！
動くわ水の、ならいと云えど、
動かぬ水こそ、月をも宿せ。
平和を好める、御神の顏も、
動ける水にわ
などうつらめや。
動かぬ水こそ
平和の鏡！

二、みイづよ、水よ！
器の形に　したがう水も
器が動けば　水またゆらぐ
平和を好める　御神の顏わ
ゆがめる器に
などうつらめや。
ゆがまぬ器ぞ
平和の鏡！

歌につれて水の精わ、或わ高く、或わ低く、時にわ急に、時にわ緩く、左に右に、前に後に、薄衣を飜しながら舞う樣わ、何時か畫本で見た事のある圖を、今正の物で見る樣で、何とも云われない面白さに、勝夫わ只恍惚となつて、兼ねての約束わない迄も、身動きさえ出來ない位であつた。

が、その中に池の水の面に、何やら寫る物が見えた。

それわ大勝魔神の顏で、此時わ全く平和の神、即ち優神の姿であると、兼ねて聞いて居た勝夫わ、目を見張つて其所を覗いた。

所がそれわ何うした事ぞ？　優しかるべき平和の神わ、眼血走り、齒を咬いしばり、髮を逆立て、眉を吊らせた、憤怒と怨恨に充ち充ちた、さも凄まじい惡相をして居る。

勝夫わ我知らず

『キヤツ！』

と、云つたが、聲を立てゝわ成らない盟に、急いで口に手をあてゝ、今一度見直すと、こわ如何にその顏わ、唇を綻ばせ、眉を開き、目を垂らし、靨をよせた、如何にも愛想の好い顏に成つて居る。

はて不思議と見て居ると、その中にまたこの笑顏わ、段々薄く消えて行つて、代りにわ以前の惡相が、またあり〳〵と浮んで來た。

それに水の精わ、少しもこれを知らぬ體で、尙も樂しげに睦まじげに、舞い狂つて居る樣子が、いよ〳〵以て奇怪でならない。

勝夫わ遂に怵えかねた。そして先刻の約束も、今わ思ひ出す暇もなく、手早く小石を拾いとつてその顏の寫つて居る、池の水面えと投げつけた。

石わドブンと音を立てゝ、恰もその顏の眞中を破つた。

その物音に水の精達わ、その水面の顏と一緒に、搔き消す樣に見えなくなつたが、中央を打たれた池の水わ、先刻までの滑かさに似ず、頻に波紋を起して居る。

勝夫わ此時我に復つたが、約を破つたその祟りの、やがて自分に及ぼうと云う、その恐惶さえ遂に忘れて、尙も水面を見入つて居た。

『何だ、矢張り水わ動くぢやないか。』

嘲ける樣に云つて見て居ると、一度立つた波の搖きわ、容易に鎭まらない許りか、次から次えと、段々に新しい輪を書いて、遠い所え及ぼして行く。

そしてその波の輪が、岸に屆いて碎ける度に、その岸に水烟を立てゝ、その場〳〵の水の精が、再び形を現わして來るのに、今度わ以前の優さしい女でなく、額からわ角を生やし、口からわ牙を吐き、手足の爪を鋭く反らした、さも恐ろしい夜叉の相をして居る。

『ヤイ、おのれ覺えて居れ！』

と、云いながら向つて來るから、さてわ自分に飛びつくのかと思うと、此方の岩の岸からも、同じ樣な奴が躍り出て、

『なにを、貴樣こそ不埒な奴だ。』

と、忽ち其所に挑み合う。

と思うと彼方の砂場でわ、森の岸の守神だと云うのと、絕壁の岸の守神だと云うのと、それに砂場の岸の守神とが、何れも惡鬼の正體を現わして、組んづほぐれつ鬪いはじめた。

『貴樣わ平生から癪にさわる奴だぞ。』

『ナニ、生意氣な事をぬかすな。此所わ元わおれの持場だ。さア此方え返してしまえ！』

『ナニこの野郎、よくおれの岸を荒しやがつた。』

などゝ各自に勝手な熱を吹いて、打ち合つたり、咬合つたり、攫み合つたり、蹴合つたりするの

で、其彈みに岸が動けば、水わ尙更搖ぎ立つて、さしも鏡の樣であつた池わ、今わ暴風も吹かぬのに、只波立つて騷ぐ許りだ。

岩の上の勝夫わ、この有樣に呆れかえつて、暫時見惚れる許りであつたが、

『何と云う淺ましい事だ。あれほど靜かなのに自慢してたのが、おれの投つた小石一つで、とう〳〵こんな騷ぎになつちまつた。……アレ〳〵あの岸も崩れかゝつた。此方の洲も流れるぞ。森の木わ根を洗われる。砂場え岩が轉げ出した。ソレ絕壁も傾いたぞ。……あゝ此分でわこの池の景色も、もうすつかり變つてしまおう。大變な事になつたものだ。』

と、初め自分の石を投げたのを、今更後悔する樣にも成つた。

が、此ま〻打棄つて置いた日にわ、果わ此水が溢れ出し、山から下えと押し流れて、自分の一番恐れて居る、大洪水に成ろうも知れない。こりやこうしてる場合でないと、勝夫わ急いで岩から駈け下り、以前の所えと取つてかえした。――大勝魔神にお願い申して、これを鎭めて貰おうと思つて。

四

勝夫わ社の前え來て見て、また驚かずにわ居られなかつた。――もう自分より先に、此所え祈願をこめて居る者がある。而もそれが、今がた池の側で見て來た、あの水の精なる者の、

まだ魔性を現わさない、優しい女の姿の者共だ。

『ヤ、また此所え來て居るな。』

と、暫く木蔭から樣子を覘いて居ると、その水の精共わ、仲間の者をおしのけてわ、代る〴〵神前に向つて、同じ樣な事を思い〳〵に祈る。

『南無大勝魔神樣！　何卒今度の戰爭の勝利わ、動かぬ樣に根を張つた、森の岸えお與え下ださいまし！』

『岩の岸こそあの池の、水を動かさぬ重石でございます。何卒これえお加勢願います。』

『いや、砂場の岸こそ、見るから平和の表象でございます。それえ勝利をお授げ下ださい！』

『なんの、葭わ風次第、素直な岸でございますから、これえ勝たせて下ださいますれば、池わ又元の通り、平和の水になりまする。』

『この絕壁の岸こそわ、水が如何に高まりましても、越されるものでわござりません。これに御力をお添え下ださい！』

『草の岸こそ黃に靑に、お池を飾つて居りますのを、水で洗ひ流すとわ、心無いにも程がございます。何卒この岸にわ事の無い樣に、御守り爲すつて下ださいまし！』

と、互いにわが岸え水を引いて、魔神の力を借りようとするが、それでもまだ魔神の方でわ、何の答も與えないので、果わ何れも躍起となつて、一心不亂に祈り立てる。

勝夫わむしろ笑止でならない。若しまた彼所え先刻の様に、石でも投げやつたらば、直ぐと魔性を現わして、いがみ合うのわ知れた事だと、思えば淺ましさに見ても居られず、今度わわざと大聲に、

『アハヽヽヽ！　馬鹿な奴が！』

と、聞えよがしに笑つてやつた。

すると女共わ、その聲を聞くと等しく、一時に此方をねぢ向いたが、

『オヽ、彼所に先刻の人が。』

『あの人こそ約束を破つて、舞の中え石を投げ込み……』

『水鎭の邪魔をして……』

『池の平和を破つた人だ。』

『ソレ捕えろ！』

『逃がすまいぞ。』

と、六人等しく躍りかゝつて來た。

けれども勝夫わ驚かない。わざと此方から出迎えて、

『先刻わ面白い舞を見せてくれて、おまけに余興の大喧嘩まで、重ね〳〵有難う。』

と、皮肉を云つて皆の顏を見くらべると、此時わもう初めの通り、優しい女に成つて居たが、色わすつかり蒼ざめて、何所やらにまだ恐懼が見えて居る。

やがて一人が恨めしそうに、

『貴君ひどいぢやありませんか。あれほど云つておくのに、石なんぞ投げつけて、折角澄んで居るお池の水に、あんなに波を立てゝしまつて。』

と、云いながら詰めよると、勝夫わまだ笑いながら、

『だつてまたお前さん達も、私に嘘を吐いたぢやないか。』

『アレ、嘘だつて？　何時そんな事を。』

『そうとぼけるなら云つてあげるが、お前さん達の初めの話しぢやア、その水鏡の舞の間にわ、平和の神様のお顏が、あり〳〵水鏡に映ると云う事だつた。』

『えゝそうですとも。』

『所が私の見て居る中に、平和の神様らしいお顏が、一寸の間映つた丈で、後わさも恐ろしい、惡魔の顏が見えたから、私わつい我を忘れて、石を投げる氣になつたんだ。それともあの惡魔も、やつぱりお前さん達の云う、平和の神様のお顏なのか知らん。それならそれと初めの中に、ちやんと斷つておいてくれたら、私も我慢して見て居たんだが、そんな話が無かつたもんだから、お前さん達に嘘をつかれた、その悔しさや腹立しさに、惡魔に睨まれた恐ろしさが交つて、とう〳〵あんな事をしちまつた。がどうもほんとに濟まなかつたねエ。』

と、わざと下手に出ると、却つて氣味惡そうに水の精の女共わ、顏を見合せて返事もし得ない。

そこを付け込んで勝夫わ、今度わ眞顏に切り込んだ。

『イヤ、嘘と云やア、もう一つ詐された事がある。――全體お前さん達わ、初め私が水を見に來たと云つた時、何と云いなすつたと思う？　この水わ魔神の力と、私達の力とで、決して動かなくなつて居る。たとい大暴風雨が起つても、小波一つ立てないと、大層自慢して居たぢやアないか。それに何だ、私の投げた小石一つで、あの通り大波が立つて、仕末に了えない位な騷ぎ、あれぢやア只の水溜りよりも、余餘動き好きの池ぢやアないか。』

と、云う中に女共わ、ます〳〵極まり惡そうに、唇の色まで變えてしまつた。

勝夫わまた疊みかけて、

『序に聞き度い事がある。一體お前さん達わ、初めの時と今見るとわ、同じ優しい菩薩の姿だが、先刻岸で喧嘩した所わ、まるで夜叉の惡相だつたぜ……それからまた、池の岸でわあの通り、恐ろしい勢で喧嘩しながら、此の御宮でわ神妙らしく、平和を楯に勝利を祈つてる。全體何方が本性で、又何方が本氣なんだ？　さアそれを云つてくれ！』

と、果わ睨む樣に六人の顏を、勝夫わ冷に見較べた。

するとその六つの顏わ、さも恐懼に耐えない樣に、細くブル〳〵慄え出したが、慄える中に其相わ、段々又變つて行き、遂にわさも悔しそうに、着て居る薄衣を咬み裂いたと思うと、忽ち恐ろしい相好になつて、

『おのれ人間の小二才めが、よくも正體を見破りおつたな。』

と、口を揃えて云いながら、其癖食つてかゝるでもなく、又しても、仲間同志で、互いに挑合ながら、池の方えと飛んで行つてしまつた。

五

何の事だ！　一度ならず二度までも、もろく正體を現わしてしまつた。なるほどあれでわあの池が、表面わ鏡の樣に澄んでも、底にわ劍や刄を充たして、又しても修羅の波を立てるのも、決して無理わない話しだ。然し、まてよ、こんな所まで見透かしちやア、折角の大勝勝神も、何だか有難味が無くなつた樣だ。歸途にお參詣すると云つたが、こりやアもう失敬して歸るとしよう』

と、獨語を云いながら、社の前を素通して、下向の道えかゝろうとする時、

『こりや待て！』

と、呼ぶ者がある。

『何だ？』

と、ふり向いて見ると、正面の例の鏡が、怪しく鋭い光を放つて居る。

『さてわ魔神が用があるのか？』
『用があるから一寸待て！　云つて聞かせる事がある。』
『面白い！　それでわ聞かして貰いましよう。』
と、引かえして神前に向い、其所の緣に座を構えると、
『如何に勝夫！　今日わようこそお參詣して、よい物を見て行つてくれた。これわおれから禮を云うぞよ。然しまだ他の事が、よく解らぬ樣だから、それを云つて聞かそうために、暫時足を留めたのだ。耳を澄ましてよつく聞け！』
『オヽ、それわ此方からも聞き度いのです。一體あの池わ不動の池とか、平和の池とか聞いて居たが、今日の先刻のあの態でわ、不動どころか大騷動、平和でわない喧嘩の池です。』
『ウン全くその通りだ。だから先刻も云う通り、平和の裏わ戰爭で、戰爭の次にわ平和が來る。卽ち戰爭と平和とわ、大晦日と元日が、背中合せに成つて居る通りだ。元日の樂しさわ、大晦日の苦しさを、越えてはじめて來るものぢや。又平和と戰爭とわ、紙一枚か髮一筋で、繫ぎ合せてある許り。その道理わ先刻の小石で、お前も自分で悟つた筈ぢや。』
『エヽ、そりや解りました。だがまだ解らないのわ、先刻の水の精共が、あの小石で動いた波から、忽ちあゝした大喧嘩……そうかと思うと此所え來てわ、矢つぱり平和を望む樣に、魔神樣に祈つて居る……何だかちつとも辻褄が合ません。』

『それわ、お前にわまだ解るまい。それを話して聞かせよう。一體水と云うものわ、方圓の器に從う、至つて素直な物だから、それで世界の萬物わ、皆この水を賴みにして、少しでもそれを取込もうとする。所がまた水の方でわ、至つて公平な物だから、器の方圓に從う丈に、器の形がゆびつなら、ゆびつ形により入らない。丁度お前の見た池も、岩の岸やら砂の岸やら、森の岸やら、葭の岸やらで、岸の形が違う爲めに、水の運びも自づから、違つて行くのが當然だ。然しそれでわ又しても、岸の者が不平を云うから、それで俺の力によつて、岸の守神の水の精に、屹度云いつけて水を鎭め、風にも雨にも動かさぬ樣にしたのだ。所が今日お前が小石を池に投げ込んだ。其所がまた不思議にも、池の中央であつたから、それで水わ公平に、圓く波紋を起したのだ。波の紋わ輪を書いて、次から次と擴がるのわ、如何にも正直に公平だ。所が岸わあの通り形が變つて、少しも平等になつて居ないから、折角正直に立つた波紋も、ある所えわ早く着き、ある所えわ晩く屆き、果わ途中で輪を切られたり、圓を缺かれたりしたものだから、忽ち水の平和を失い、さてこそあゝした騷ぎとなつた。これと云うのも岸の者が、各自我岸可愛さに、森の者なら森許り、崖の者なら崖許り、又砂わ砂、葭わ葭と、自分と同じ岸許りで、この池を圍んでしまおうと云う、慾が常からあるものだから、それで一寸でも棧會があると、つい平生の愼みを忘れて、あんな亂暴を働くのだ。』
と、理由を委しく話したが、又少し聲を低めて、
『イヤ、それと云うのも、今日わおれがぬかつたからだ。』

と、私かに太息を洩らす樣子だ。

勝夫わ段々に解つて來たが、又思い出して、

『それでわ先刻舞の間に、水に映つたあの顏わ、一體如何したと云うんです？』

と、聞くと、魔神わつよく頷いて、

『ウン、其所だ。あの顏わ誰あろう、この魔神が映つたのだ。』

と、云う中に勝夫の前に、スツクと立て現われたのわ、正しく先刻池の面に、あり〳〵と見えたその顏の主！　而もその顏わ、優しい平和の守護神と、恐ろしい軍神との、兩方の相を備えて居たそれが見る者の瞬の度に、交る〳〵目に映じる。

『オヽ、それでわ貴君でございましたか。それなら石なぞ投げなけりやようございました。何卒御勘辨下ださいまし！』

と、今更謝罪るのを魔神わ制して、

『イヤ、決して案じる事わない。過失の功名と云う事もある。今日の以前のあの石わ、云わば頂門の一針で、おれの爲めにわ此上もない、油斷を警戒の石であつたぞ。』

と、云いかけて、語を改め、

『一體あの池わ、なるほど不動とも平和とも、世間で噂をして有難がるが、實わ何時波が立つて、水が荒ようとも知れぬと云う事わ、このおれにわ解つて居つたのぢや。然しそう荒されてわ、おれの威光にもかゝわる事と、實わ横着な心から、水の精共に云いつけて、水鎭の舞をさせ、それを怠らせぬ樣に、おれが上から覗いて居たのだ。然しおれにわ水の底まで、何も彼も見え透く通り、機會があつたら水の精共が、岸爭いで喧嘩をするのが、よく解つて居つたものぢやから、平和な相の裏からも、つい恐ろしく睨めつける、軍神の相が現われて、水にもそれが映つたのぢや。それをお前に見つけられて、とう〳〵こんな仕末になつたが、こんな事なら初めから、水の精共を引きあげて、篤と云い聞かせてやつた方が、水を濁してしまわぬ丈でも、池の爲めにわなつたのぢや。……然し、其所が所謂る雨降つて、地の固ると同じ事。池の水も大掃除をしたら、却つて後わ澄むであろう。――イヤ、こう云う中も水の精共わ、大方戰い疲れた頃ぢや。ドレ行つて淸めてやろう。お前も一緒に來るが可い。』

と、魔神わやがて先に立つ。

勝夫わ此先何うなる事かと、好奇心に足もいそ〳〵魔神の後からついて行つて、以前の池え來て見ると、先刻初めて見た時とわ、はや大分景色が變つて居る。

森の岸と見た所にわ、葭が夥しく茂り込み、絕壁の岸わ半ば崩れて、砂の岸と成つて居る。かと思うと岩の岸の、大岩わ二つに割れて、前わ小島の樣になつて居ると、上にわ一面の草が生えて居る。

この景色の變つた上で、相も姿も變つた水の精が、彼方此方に入り亂れてわ、波を蹴立て、水を

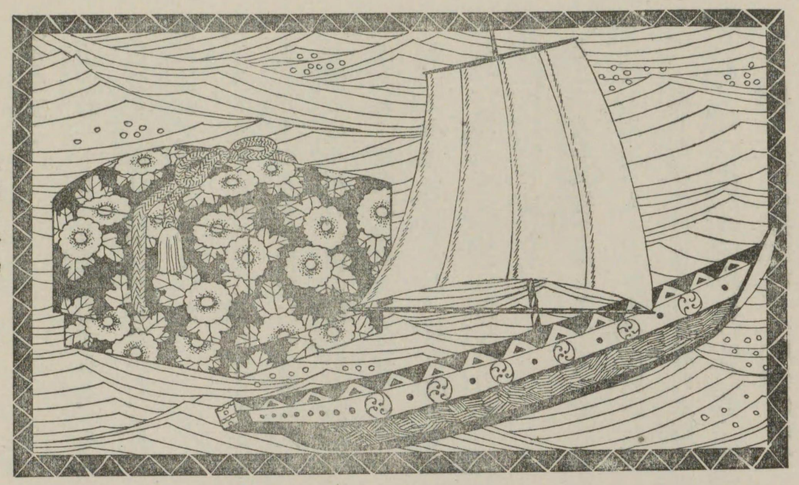
跳ね飛ばして、夢中になつて闘つて居る態わ、若し水地獄と云う所があつたら、こうもあろうかと思われる位だ。

これを見ると大勝魔神わ、一聲高く、

『しづまれッ！』

と、號令をかけたと思うと、そのサツとあけた口から、魔風が忽ち吹き起つて、森の大木も、岸の大石も、根こぎに倒して池えなげ込み、池の水わまた水柱を現して、さながら龍の天上する様に渦巻きながら空を衝き、その間に水の精共わ、まるで木葉か蜘蛛の子の様に、捲きあげ巻きおろされ、吹き据え、吹き散らされて、天地も一時に崩れ込む勢、流石の勝夫も氣を失つて、暫時其場に突伏してしまつた。

やゝあつて我に復り、初めて目をあげて見ると、目の前にわ洋々として、さも清らかな大池が出來、そしてその四邊の岸わ、皆蘆原になつて居て、そしてその池の中にわ、眞圓な空の日が、さも長閑に浮んで居た。



小川の拾物

附錄

姫の小舟

一　小川の拾物

淺い緑の木立をもれて、折々輕い風が吹いて來ると、其度に狹い小川の上に、淡い小波が寄せてわかえす。

丁度その岸の所え、一人の少女が來て居る。粗末な單物にこれも汚れた前垂をかけ、赤い襷をかいくしく、頭にわ手拭を冠つて居るが、手にさげて居るバケツをおろすと、其中から洗濯物を出して、やがて小川で洗濯をはじめた。流れを隔てた木立でわ、もう蟬が鳴き出して居るが、其他にわ只衣を洗う音ばかりが、夏の眞晝の靜

けさを破る。

少女わ一トしきり洗濯をすると、それをよく絞りあげて、元のバケツに入れ、頭にかぶつた手拭を取つて、濕れた手を拭きながら、見るともなしに川の面を見ると、其處に玩具の小舟が一つ、靜かに流れて來るでわないか。

『まア可愛いお舟！……誰が浮かしたんだろう？』

と、川上の方を見やつたが、誰も人の影わ見えない。

一體この小川わ、山の湖水からわかれて來て、末わ町の大川に注いで、それから海えと入るのだ。

『ほんとに何處から來たのだろう？』

と、又小舟を見直すと、氣の故かその小舟わ、下えと流れる波に乘りながら、少しも先え進もうとせず、却つて岸に居る自分の方え、段々近づく樣にも思える。

『兎に角拾つて見よう。』

と、少女わ又褄をはしよつて、やおら小川え踏み込んだ。そして二足ほど行つた所で、屈んで手を伸ばしたら、もうその小舟に屆いた。

で、取りあげて見ると、それわ木彫に彩色して、それに小さい帆までつけた、如何にも綺麗な小舟だが、只の仕入の玩具とわ思えず、何うしても好事の人が、特に誂えたものらしい。

と、思うとその持主が、一層氣になつて來たので、少女わ其儘バケツの中に入れて。洗濯物と一所に、一まづ自家え持つて歸つた。

其家と云うのわ、小川から半町ほど離れた、森の陰の一構。小さな藁葺の一棟で、南の方にも畑があり、それにつゞいて鷄小屋が出來て居るが、丁度此時母親わ、背戸から出て此鷄共に、餌をやつて居る所であつた。

其所え歸つて來た少女わ、

『阿母さん……只今……』

と、聲をかけると、

『小夜ちやんかエ。御苦勞だつたネ。』

と、云いながら、振りむきもせず、

『御洗濯が出來たら、其所え干しといとくれ！　お天氣が好いから、晩までにわ乾くだろう。』

と、畑境にこしらえてある、干場の方を顎でさした。と、お小夜わ、

『エ、……』

と、返事わしたが、その用わ後にして、

『それより阿母さん……私こんな物拾つて來たのよ。』

と、云いながら歩みよつて、先刻の小舟を母に見せた。

『何を拾つたツて？』

と、母わ何の氣無しに、此時初めて振りむいたが、小舟を見ると、さも驚いた樣に、

『アラそのお舟？　ドレ、お見せ！』

と、急いで取ってつく〳〵見ながら、

『これお前何所で拾つたの？』

『お洗濯してる所え、流れて來たから拾つたんだワ。綺麗なお舟ぢやありませんか。』

『綺麗にもなんにも、こんな結構な物アありやしない。これお前何所から來たと思う？』

『知なないワ、私。阿母さん知つてるの？』

『私だつて知らないけども、屹度そうだと思うんだよ。これわお前濱宮樣の、お姫樣のお舟なんだよ。』

『濱宮樣？　あのこの先の湖水の側の、あの立派な御殿のある……。』

『あゝそうだとも。はやくお屆け申さなけりやいけない。』

『でも、それを何うして知つてるの？』

『だつて評判のお舟なんだもの。このお舟わ不思議なお舟で、今見るとこんな玩具の舟でも、使い樣によつてわ、これが大きな舟になつて、どんな遠い所えも渡れるんだとさ……。』

『まア好いお舟だわねえ。』

『その代り扱い方が悪いと云うと、その持主に祟があるんだつて。』

『まア、恐いお舟だわねえ。』

『それでお姫樣が大切にしてらつしやるんだから、早くお返し申してお出でよ！』

『そう、それぢやア直ぐに持つてつてあげましよう。』

『早くお屆け申しておいで……干物わ私がしておくから可いよ。』

と、母わしきりに急き立てるので、お小夜もぐづ〳〵してわ居られず、

『それぢやア私行つて來るワ。』

と、二歩斗り行きかけたが、又小戻して、

『でも阿母さん！　こんな風俗で可いでしようか。』

『何だねエ。どうせ私達の事だもの、いくらめかしても仕樣がないぢやないか。それより早い方が可いんだから、道草食わずに行つといで……。』

『ぢやア大急ぎで行つて來るワ。』

と、お小夜わ例の小舟を持つて、急いで我が家を出ると、直ぐ川上の御殿えと志した。その後に母わ、娘の洗濯して來た物を、竿に通して物干にかけ、又鷄の餌もやつてから、家の中え入ろうとすると、こわ如何に室の中に、今出て行つた筈のお小夜が、床に就いて寢て居る樣子。

『アレ……お前何してるんだネ。大切のお舟を屆けないで、呑氣に寢てる所ぢやないぢやないか。』

と、叱る樣に云つて枕邊まで來ると、お小夜わフト目をあけたが、

『なアに阿母さん？』

と、まだ怪訝な顔をして居る。

『なアにぢやないよ。お前。今お洗濯に行つて、お姫様のお舟を拾つて來たから、直ぐお返えし申しに出かけたんぢやないか。』

『アラ……誰が？』

『お前がさ……』

『何時？』

『たつた今……』

『うそよ。私今朝から鹽梅が悪いんで、こゝに寢て居た斗りだワ。』

と、これわまた意外の言葉だ。

二　香函の行方

居ない筈の娘のお小夜が、現在自家に臥て居る計りか、而もそれが朝からの事だと云う。さりとわ譯の解らぬ事、これわ此方まで寢もしないのに、夢でも見て居るのでわないかと、母わ今更呆れてしまつたが、はやくも思い當つたのわ、あの小舟にわ魔力があつて、それに掛ると種々な不思議が起ると、兼ねて聞いて居る事だ。

そしてその魔力の爲めなら、今現在此所に居る娘も、實わ眞のお小夜でわあるまい、一つ試して見るが一番と、母わわざと荒々しく、

『何だねえこの人わ！　愚圖々々してる所ぢやないよ。しつかりお仕な！』

と、云いながら、その手を取つて引き起そうとすると、まるで煙でも摑むように、少しも手應が無い計りか、今まで見えた娘の姿わ、蒲團と共に消えてしまつた。

途端に後で聲がして、

『阿母さん……只今！』

と、云うのが又お小夜の樣だ。

『あれツ……お小夜かエ？』

と、云いながら振りかえると、これわまた、先刻洗濯から歸つたまゝの姿で、上り口に立つて居るが、その手にわまだ小舟がある。

『オヤ何うしたの？　お前その舟をお返し申しに行つたんぢやないかイ？』

『エヽそうですワ。』

『それに何うして持つて歸つて來たの？』

『アラ私、持つて歸りやしないワ。』

『でもその手に持つてるぢやないの？』

『アラ、これわいたゞいて來た御褒美だワ。』
『ナニ御褒美いたゞいて來た？　ドレお見せ！』
と、走りよつてそれを見るのに、先刻拾つて來て見せた小舟と、寸分差異が無い計りか、正しくそれに相違無い。
『まア不思議だ。それぢやアお舟をお屆け申した御褒美に、そのお舟をいただいて來たんだネ。』
『アラお舟なんぞいたゞいて來やしないワ、綺麗な香函ですよ。』
『何云つてるんだネ。香函だなんて。それわお舟だよ。』
『いゝえ、香函よ。』
『お舟だつて云うのに、よく御覽な！』
と、母が飽くまでも云い張るので、お小夜わ念の爲め見直すと、こわ如何に、先刻先方でいたゞいた時わ、正しく綺麗な蒔繪の香函だつたのが、何時か先刻の玩具の舟になつて居る。流石のお小夜も驚いた。
『アラ何うしたんでしよう。先刻の舟だワ。』
『それ御覽な！　お前何らかしてるよ。』
『ほんとに不思議だわねえ。』
と、呆れて立ちすくむ娘の樣子を、また改めてぢつと見ながら、

『お前わほんとの小夜ちやんだろうねエ。』
『アラ何故？　私ですワ。』
『全く小夜ちやんにちがい無いネ。』
『變な事聞くのねエ、私小夜ちやんよ。』
『ほんとの小夜ちやんなら云うがネ。今もつと不思議な事があつたんだよ。』
『どんな事が？』
『たしかに出てつたと思つたお前が、奥で蒲團被て臥てるぢやないか。何うしたつて聞いたらば、今朝から鹽梅が悪いんだつて……そんな筈わ無いと思つたから、無理に起そうとしたら、驚くぢやないか。そのまゝ煙の樣に消えてしまつた。』
『まアいやだ、幽靈見たいネ。』
『お前わちやんと活きてるんだから、まさか幽靈ぢやアあるまいが、何うしても不思議だつたよ。』
『何だか氣味が悪いワねえ。』
と、お小夜わ恐そうに母に取りつく。
母わその背を撫でながら、
『それと云うのも、實わみんなその舟のお庇なんだよ。先刻も云つた通り、濱宮のお姫樣の樣な、立派な方が持つてらつしやれば、世にも貴い寶物なんだが。私等風情の者が持つと、却つてその祟

で、いろんな魔が指すのだよ。』
『だからお返し申しに行つたのに……。』
『それでお前確にお返し申したのかエ。あの濱宮様の御殿まで行つて？』
『いゝえ、御殿までわ行かないの。』
『それぢやア何所えお返し申したんだエ？』
『丁度先刻の川のところえ來たら、其所にお姫様が居らしつて、お舟を探して居らしつたから、直ぐにお返し申したら、大層お喜びになつて、持つて居らしつた香函を出して、御褒美に下だすつたんだワ。』
『そ、それが可怪いんだよ。そのお姫様も眞のお姫様ぢやア無いんだよ。全くこのお舟の魔力の所爲だよ。』
『まア氣味の惡い。』
と、お小夜わ今更先刻の小舟を、まるで蛇か蝮の様に、身振して捨てようとすると、母わまた慌てゝ止めて、
『お待ち〳〵、そんな手荒な事をすると、またどんな祟が來るか知れない。それよりもその舟わ、なまじ初めから拾わなかつた方が可かつたんだから、此儘元の所え持つてつて、川え流しておしまいよ。』

『アヽ、ぢやアそうするワ。けども私何だか一人ぢや恐いワ。』
『いゝよ、私が一所に行つたげよう。』
と、母わ流石に娘をいたわり、舟も代つて自分が持つて、やがて以前の川の岸え來た。
『何所の所で拾つたの？』
『彼方から此方えよつて來たんだワ。』
『ぢやア拾つたのわ此所だネ。』
と、自分で持つて行つて捨てようとすると、何うしたものかその舟が、へばり付いた様で手を離れない。
『アラ變だ、私ぢやアいけないんだね。やつぱし拾つたお前が捨てなけりやア……。』
『ぢやア私がやつて見ましよう。』
と、母の手から受け取つて、先刻拾つた時の様に、二た足許り川え踏み込み、此所と思つた所を見て、その舟を水の上に置くと、舟わそのゝまお小夜の手をはなれた。
まづよかつたとお小夜わ、急いで岸え引かえし、さて念の爲めに見かえると、もうその舟わ中程まで行つたが、不思議にもその上にわ、セルロイドの人形の様な、可愛い小人が二人乘つて居て、さも巧みに操つて行くと、舟はまるで矢の様に走るのに、遠く行くほど小さくなる筈が、却つて段々大きくなつて、ものゝ三町と隔つた頃にわ、上の小人わ二人とも、もう立派な人間位になつてし

まつた。

不思議わまだそれ斗りでわない。お小夜わ此方で見て居るつもりが、まるでその舟に吸いよせられる樣に、自分もその側えよつて行く。

『アラ、アラ、お母さん何うしたんでしよう?』

と、心細さに母を呼ぼうとすると、こわ如何にその母わ、遠く堤を歩いて行つて、少しも此方を振りむかない斗りか、それと一所に列んで行く小娘が、何だか見た樣な人だと思うと、誰あろうお小夜自身でわないか。

『アラ、アラ、彼處に私が……。』

と、我知らず口走ると、

『オ、これわお姫樣……お迎いに參りましてございます。』

と、何時が小舟が大舟になつて、自分の前に寄せられた。

三　不思議の水鏡

何が何やら、夢に夢見る心地のお小夜わ、それがまた別に不思議にも感じなくなつて來て、お姫樣と云われると、自分も直ぐに其氣になり、

『オ、、大儀であつたなア。』

と、應揚にその舟え乘り移ると、迎えに來た小人達も、そのまゝ尋常の人間になつて、

『さぞお待ち兼ねでございましたろう。』

『さア、何卒これえお召し下ださい!』

と、お小夜を案内して、胴の間にこしらえてある、一段高い座に著かせると、また何所から現われたか、可愛らしい腰元が二人、左右から辭儀をしながら、茶をすゝめたり、菓子を供えたりする。

『まア私……何時の間にお姫樣になつたんだろう。』

俄に我に復つたお小夜わ、覺えずこう口走つたが、腰元達わ耳にもかけず、

『ソレ、お姫樣のお慰み……樂隊衆頼みますぞ。』

と、合圖をかけると、やがて船の一隅から、さも面白い奏樂が聞え出した。

それにつれて船わ動き出す、何だか良い香のする樣に、凉しい風わ頰をかすめて來る。お小夜わこのまゝ極樂えでも送られる樣な、好い心地に醉わされてしまつた。

その中にまた樂に連れて、綺麗な衣裳を著けた踊子が、目の前え出て踊を始めた。

腰元二人わお小夜にむかい、

『あれが例時の御氣に入りのでございますが、他にお好みがございますなら、何卒お仰せ下ださいまし!』

『今日わ踊子も、大勢參つて居りますから、如何なお好みでも出來ますでございましよう。』

と、切りに機嫌を取つて居る。

お小夜わ一寸行詰つたが、

『何でもよろしい。皆の好きなのを見せておくれ！』

『それでわ左樣致しましよう。』

と、これから踊子わ代る〳〵、種々な曲を踊つて見せた。或わ上品に靜なのや、或わ滑稽に賑なのや、長いのや短いのや、重みのあるのや、輕いのや、數を盡して踊つて見せるので、果わお小夜も漸く飽きて、時々わ踊から離れた眼を、遠い景色えと配ばる樣になつた。

と、見ると又腰元共わ、

『お姫樣も、どうやら御退屈と見えまする。それでわ踊わ中休と致しまして、今度わ何かお口に合いますものを……』

『オヽ、それがよろしうございましよう。』

と、云いながら立ち上つたが、暫時すると目の前え、山の物、海の物を盡して、世にも見事な御馳走が、數限りなく運び出された。

お小夜わまた煙に捲かれて居ると、

『さア何卒召し上りまし！』

『お宜しければ御代りを！』

と、二人わ給仕に控えて居る。

實わ朝から洗濯に出て居て、大分空腹になつて居たお小夜わ、こうなると別に遠慮もしない。直ぐ箸を取て見るのに、何れもこれも甘味い物斗り、我を忘れて食べて居る間、また一しきり音樂があつたが、やがて腹も朽くなつたので、箸を下に置いた時見ると、折角運び出された御馳走わ、まだ四半分も食べてわなかつた。

が、腹が朽くなつて見ると、もう見るのも厭になる。そして急に眠くなつて、我知らず欠伸をした。

『オヤ、お眠いのでございますか。』

『でわお枕をさしあげましよう。』

と、痒い所え手の屆く腰元達わ、やがて枕を持つて來る、蒲團をも運び出す。

『しばらくお横にお成り遊ばせ！』

『然しお風を召しません樣に！』

と、お小夜を床の中に入れると、また樂隊わ低い調子で、眠を誘ふ曲を奏しはじめた。お小夜わ眼を閉ぢるが早いか、忽ち正體を失つてしまつた。

さつと水面を拂つて來る風が、冷たく頸元に浸みた拍子に、お小夜わフツと目をあけた。

が、見るともう此時わ、先刻の様な大船でなく、漸く自分一人が乗れる位の、小さな船に乗せられて居たが、中央に立つた帆柱にわ、帆が一杯に張られてあるので、その勢で走るのわ、まるで氷を辷る様だ。

『アラ、私何うしたんだろう？　何時こんな船に乗つちまつたんだろう。何だか恐いワ。一寸、ちよいと止めとくれよ、止めてちようだいよ。』

と、云つて見たが、別に船頭も居ないので、誰も止めてくれるものもなく、船わどん〳〵走る斗りだ。

お小夜わ氣が付いて、帆をおろしたら止まるだろうと、急いで帆綱を手ぐつて見た。

が、帆がなくなると、船わ見當が極まらなくなつて、今度わ一つ所をクル〳〵と、渦に卷かれる様に廻わりはじめた。お小夜わもうたまらなくなつて、

『ア、大變だ〳〵。誰か助けてエ、〳〵！』

と、聲を限りに呼んで見ると、それも答える聲わ聞えず、却つて何所でか笑聲がした。

『まアひどい、私がこんな酷い目にあつてるのに、誰だか笑つて居るなんて……』

と、怨めしそうに見まわすと、丁度自分とわ半町ほど離れた所に、同じ様な小舟があつたが、それにわ二人の女が乗つて居て、而も此方を指さしながら、面白そうに笑つて居る。

『何てエ失敬な人だろう。人の困つてるのを面白がつて……』

と、悔しそうに見直すと、こわ如何にその女の、一人わ自分の母親で、今一人わ又しても、お小夜自分自身でわないか。

先刻もこんな事があつたと思うと、お小夜わ頭から水を浴びに様に感じた。

『それでわ此所に居るこの私わ、一體眞實わ誰なんだろう？』

と、我と我身を疑う様になつたが、生憎側にわ鏡も無いので、自分の顏を見る事が出來ない。

仕方が無しに伸びあがつて、恐々ながら舷に取りつき、水に寫して見ようとするが、水わ元より浪立つて居るので、鏡の代りになつてわくれず、やゝともすればその飛沫に、頭も顏も濡れる斗りだ。

『ア、私何うしたんでしよう。夢ならはやく覺める様に……それとも魔力にかゝつてるなら、はやく解かして下ださる様に！』

と、今わ一所懸命になつて、掌を合わせて念じると、その一心が屆いたか、船わ次第に回轉をゆるめて、やがてハタリと止まつたと思うと、水もまるで油の様に靜まつて、小波一つ立てなくなつた。

その時はじめて水鏡を見ると、自分の顏を寫した筈が、またついに見た事もない、美しい姿の可愛らしい顏の、お姫様があり〳〵と見えて居る。

『オヤ貴女わ……』

と、思わず叫ぶと、キヤツと何處かで魂切る聲！

四　森の謎

思いがけない叫聲に、お小夜わ驚いて見廻わすと、丁度自分の乘つて居る、小舟の艫の板子の上に、まるで高い所から投げ落された樣に、一人の少女が氣絶して居る。

『まア何うしたんだろう？』

と、急いで抱き起してよく見ると、今しも水の鏡に寫つた、姫の姿その儘である。でわ矢張り今の影わ、私のでわ無かつたのかと、思いながらも棄てゝわおけない。

『お姫樣ア……！　しかり遊ばせよう！……お姫樣ア！　〳〵！』

と、叫んで見たが容易に答が無いので、今度わ手拭を水にひたして、その水を姫の口に搾り込んで、もう二三度呼んで見ると、漸くそれが通じたか、眼を薄く明きかけた。

『もし、お姫樣！　しつかり遊ばしませよう！』

と、云いながらぢつと顏を見込むと、その顏をまた見あげながら、

『……オ……お前わ？』

と、幽かながらも聲が出た。

もう大丈夫と思つたが、まだ抱えた手わ放さず、

『お氣が付きましたか？』

『……此所わ？……』

『此所わ舟の上でございます。』

『エツ、舟の上？』

と、姫わ初めて眼を見張つて、四邊を心元無さそうに見まわしたが、まだ物に怖れるように、

『舟の上……舟の？』

と、更に身體を震わせた。

お小夜わまた、姫の全身をあらためながら、

『何所も御怪我わございませんか？』

『怪我わ無いけども、私斯うしちや居られない。はやく陸え〳〵！』

と、悶搔きながら立ち上ろうとしたが、またよろけてドウと倒れた。

『ソレ、御危いぢやございませんか。……御身足がお痛いのでございましよう？』

『イヤ、足なんぞ痛かア無いの。……手だつてまだよく利くわ。はやく陸えつけとくれよう！』

と、あせる。

『よろしうございます。それぢやア急いで參りましよう。』

と、お小夜わ其所にあつた櫂を取つて、力にまかせて漕ぎはじめると、姫わまだもどかしそうに、

『こうすると早くなるワ。』

と、云いながら自分の手で、帆を一杯に張りあげたが、それが如何にも馴れて居る。

さてわいよ〳〵この方こそ、兼て聞いて居た濱宮様のお姫様、即ちこの小舟の持主であろうと、漸く腑に落ちたお小夜わ、

『それにしてもお姫様！　一體貴女わ何方に居らしつて、何所から此所え入らしつたんでございます？』

と、心配そうに聞いて見た。

すると姫わ、

『私、今まで自家に居たの。けども此間から舟が失つたから、それを心配して居ると、先刻變な人が出て來て、その舟が欲いしなら、私が在所を教えてあげましようツて、私の手を取つたと思うと、直ぐ空を飛ぶぢやないの。私わ恐いから眼をつぶつてしまうと、そんな事しちや何も見えない、眼を明けて〳〵！　と云うから、我慢して目をあけて居たら、何時の間にか大きな〳〵森の中え入つてしまつた。するとその人が、恐ろしい魔物の正體を現わして、今日からお前わ此所に居るのだ。決して外え出る事ならんて、嚴しく云うと森の中の、暗い岩屋え押込められてしまつたの。』

『まア……何うしてそんな事になつたんでございます？』

『それわ全く舟の祟りで……私わちつとも知らなかつたけども、あの舟わその森の木で、魔物が自分の子供の玩具に、昔こしらえて置いたというのを、私の阿父様が狩え入らしつた時、魔物の留守に踏み込んで行つて、默つてその舟を拾つて來て、私のお土産に下だすつたんだとさ。だから魔物が大層怒つて、その舟を取り返そうとしても、阿父様の御威勢が強いので、急にわ手が出せなかつたが、生憎此頃阿父様わ、遠いお國えお出になつて、御殿に居らつしやらないもんだから、其隙にやつて來て、まづあの舟を取りあげておいて、それから私までさらつて來てしまつたんだよ。』

『まア……酷い目にお會いなんでございますね。』

『まだそれ斗りぢやないんだよ。それで私わ魔物の玩具を、勝手に使つて居た罰で、これから先三年と云うもの、丁度あの舟を玩具にして居た間丈、あの森を出る事が出來ないの。私ア悲しくつて毎日泣いて斗り居たが、それでも舟の事わ忘れられないで居ると、今日また魔物がやつて來て、そんなに舟を戀しがつても、あの舟わもうこんな所にわ無い。だが見度ければ見せてやる。只口を利いちやならんぞ。ソレ、彼所にと云いながら、高い所えさしあげられた時、見ると丁度此川の上に、この舟が見えるぢやないか。そうしてその舟の上にわ、私がちやんと乘つて居るぢやないか。――まア私があんな所につて、思わず聲を出したらば、その拍子に投げつけられて、それ限り少時夢中になつてしまつたの。』

『まア、それぢやアその魔物に、此所え投げられたと仰有るんですか。……ですが丁度好いぢやございませんか。こうして此所え投げられたを幸い、この舟を此方え取り返して、此儘御殿えお歸り

遊ばしてわ……。』

『所がそれわ出來ないんだよ。そんな事しようものなら、どんな仇をされるか知れない。だからはやく陸えつけて又元の森え歸らなけりやア……』

と、云う時また何所やらで、ゲラ〳〵〳〵と云う高笑いが聞えた。姫わまた身をすくめて、

『ソレ、魔物の聲がする。こうして姿わ見えないでも、何所で見てるか知れないんだから、はやく歸えしておくれよ。』

と、いかにもそれを怖れて居る。

『でわよろしうございます。私が御送り申しましょう。』

と、お小夜わまた櫂をはやめながら、

『然しそう伺つたので、私もはじめて解りました。何ですか彼お舟を拾いましてから、不思議なこと斗りあるんでございますよ。そして私がお姫様になつたり、お姫様がまた私になつたり……まるで夢の様なんでございます。で、氣味が悪いと思つてた所ですから、はやく陸え上つて、こんな舟わ返してしまいましよう。』

と、云う間にもう陸えついた。

『でわお上り遊ばせ！』

と、まづ姫を先えあがらせ、自分も後から舟を乘りすてゝ、その足を陸につけたと思うと、不思議や今迄の舟わ、まるで木の葉の様になつて、渦の中え卷き込まれてしまつた。

『アレ〳〵アレ、御覽遊ばせ！　舟がもう見えなくなりました。』

云いながら姫を見かえると、こわ如何に、姫の姿も、まるで地に吸われた様に、もう見えなくなつて居る。

『アラ、如何遊ばしたんだろう？』

と、驚いて見まわす彼方に、大きな森が茂つて見えたが、その暗い木の間から、謎の様に見える灯の影！　さてわもう彼所にかと思うと、又いたわしさが增して、どうも此まゝわ歸えられなくなつた。

『よし、すぐに行つて……』

と、お小夜わ甲斐々々しく褄を端折つて、急いでその森えと向つた。

やがて森の入口まで來ると、サツと吹きつける腥い風、これが魔風とでも云うのだろう。お小夜わ思わずタヂ〳〵となつた。

けれどもまた氣を取り直して、その木立えと分けて入ると、外わまだ日が高いのに、此所わまるで夜の様だ。

が、その暗い〳〵中から、例の謎の灯の影が、却つて此方え近よつて來る。

五　地の宮

晝日中に灯の影が見える。それが而もあり〳〵と、夜見るのと同じ光で、森の中からさして來る。これが已に不思議なのに、その灯わ段々近くなつて、さながら自分を迎える樣にも思える。――お小夜わ氣味惡くないでわないが、斯うなつてわ又乘りかけた船と、度胸を極めて此方からも、ぢつとその灯を見つめてやつた。

と、その灯わ獨りで動くのでわなく、側え來た所でよく見ると、一尺ほどの小人に擔がれた、その體ほどの鬼灯提燈であつたが、小人わお小夜を見ると、直ぐ立ち止つて丁寧に辭儀をし、その小さい手で後の方をさして、

『何卒此方え！』

と、云う樣子をする。

こんな者なら恐くもないが、奥にわ何樣な奴が居るのか解らない。それに第一氣になるのわ、先刻見えなくなつたお姫樣の行方だ。

念の爲めにその小人に、

『モシ……あの濱宮のお姫樣わ、もう此所えお歸んなすつて？』

と、聞いたが、小人わ無言で點頭く斗り、只切りに奥を指して、案内しようと云う風を見せる。

『來いと云うなら行くけども、行けばお姫樣にお目にかゝれるの？』

と、聞けば、小人わ合點々々する。

『オヽ、そう。そんなら行くわ。』

お小夜わ又歩き出した。で、十歩斗り歩くと、チョコ〳〵と又一人、提燈持の小人が出て來た。次の十歩でまた一人、それから十歩でまた一人、こうして十歩に一人宛殖えて、それが十人になつたと思うと、提燈が十箇になつたから、大分四邊が明るくなつた。

それではじめてよく見ると、丁度正面の所にわ、大きな鐵の門があつて、同じ樣な小人が二人宛、左右に立つて番をして居たが、お小夜を見ると姿勢を正して、まるで隊長が門を入る時、番兵のする樣な敬禮をした。

お小夜も愛嬌に會釋したが、その門を入つてしまうと、小人わ、一齊に提燈を消してしまつたから、さア急に暗くなつてしまつた。暗くなると小人達わ、急に口を利き出して。

『お客樣々々々！　おあぶないからお手を取りましよう！』

と、左右からよつて來て、軟い小さい手で、お小夜の兩の手を取つてくれた。

『まア有難う！　どうしてこんなに暗いんだろう？　何故灯をみんな消しちまつたの？』

と、云うと、小人達わそれに答えて、

『暗いのわ貴女斗り。私共にわよく見えますから、それで灯わ消しました。』

『オヽ、お前達わ何だつて、先刻わあんなに默つて居たのに、此所でわ口を利き出したの？』
『先刻うつかり口を利くと、森の魔物に見つかつて、直ぐ攫われてしまいますから、それで默つて居りましたが、此所え來りやアもう大丈夫、此方の領分だから恐い事わありません。』
と、云う。
『此方の領分？……それぢやア此所わ森ぢやアないの？　森の魔物の家ぢやアないの？』
『何う致しまして！　此所わ地の神様の御領分、其御殿も直きでございます。』
と、云われるので氣がつくと、もう目の前にわ金色に光つた、立派な御殿の玄關が見えて來た。
が、お小夜にわまだ解らない事がある。
『そうするとあのお姫様も、やつぱり此所え來て居らつしやるの？』
『ハイ、左様でございます。たつた今御連れ申しました。』
『まア……それぢやアお姫様わ、森の魔物に取り戻されたんぢやなくつて、地の神様の所え連れられてらしつたの？』
『まア然うです。委しい事わ地の神が、何れ御話しになりましようから、兎も角もこれから御通り下ださいまし！』
と、はや玄關から案内に立つ。
お小夜も初めわ氣味が惡かつたが、こうなるともう安心して、早くお姫様に會い度くなつた。で、遠慮もせずに上つて行くと、長い廊下を折り曲つて、やがて立派な御殿え通されたが、此所も同く金銀造りで、目もまぶしい位である。
『少々これにお待ち遊ばして……』
と、席を與えてくれるので、其儘其所に控えて居たが、間もなく正面の扉が開いて、其所から現われた者を見ると、如何にも美々しく着飾つて、銀色の髪の上に、金の冠をいただいた、老年の小人と一所に、濱宮の姫も居るでわないか。
『オヽ、お姫様！』
と、我を忘れて走りよろうとすると、姫わ何故が手で制して、老年の小人に氣を兼ねた。
と、悟つたから、お小夜もまた差し控えてしまうと、それを見た老年の小人わ、ニツコリと優しく笑つて、
『オヽ、お小夜もよく來なすつた。お姫様も待つてらしつたぢや。何を隱そう、私わ此所の地の神ぢやよ。決して恐い者でわないから、安心して居るがよい。』
と、いかにも親切らしい言葉だ。
お小夜もまた丁寧に、
『これわ初めてお目に掛ります。……然し地の神様！　お姫様わ森の魔物に、此間から攫われて居らしつて、今日も一寸脫けて居らしつた所を、直ぐ又取り戻されになつた筈なのに、何うして此方

に居らつしやるのでございましよう？』

と、聞くと、

『その不審も道理だが……實わあの森の魔物と云うのわ、私の實の伜なのぢやが、私のお庇であの通り、森が追々茂つて來ると、心も段々増長して、此頃でわ父親迄馬鹿にして、少しも云う事を聞き居らず、又しても悪戯をして、人に難儀をかけるのを、無上の娯樂にして居るのぢや。それで此間も、この姫の父君が森え狩に入らしつた時、子供の爲めに拵えておいた、小舟を持つて行かれたと云うが、それも實わ悪戯者奴が、こうして姫を釣りよせようと、餌に拵えておいたのぢや。それで首尾よくこの姫を、自分の所え攫つて來て、毎日いろ〳〵に苛め立てる、何たる心得違いの事ぢやろう。私わ度々小言を云うのぢやが、なか〳〵聞こうともせんでわないか。所が今日わ幸いに、姫に小舟を見せると云うて、森から連れ出したと聞いたから、其所で此方から手をまわして、途中で首尾よく横奪して、此方え連れ込んでしまつたのぢやが、その後を慕うて來た殊勝な心根のお前ぢやから、序に迎いにやつたのぢや。なんと仔細が解つたら、もう恐い事わあるまいがナ。』

と、すつかり理由を聞かされると、お小夜も大きに安堵したが、

『それでわもう私共わ、森の魔物の手にかゝらずに、無事に歸えれるのでございますか？』

『オヽ、それにわ弟の水の神に、今頼んで置いた事があるから、無事にあの船で送らせてあげるよ。』

と、云いながら後をむいて、何やら合圖をしたと思うと、其所えチヨコ〳〵と現われたのわ、先刻のとわ又異つた小人！　而もそれわ此間、川で見た覺えのある顔だ。

『オヽお前わ……』

思わず聲をかけると、先方でもよく知つて居て、

『是わお小夜さんにお姫様、よく御出で下ださいました。さアこれからわ私共が、御供致して參ますから、もう御心配遊ばしますな！』

と、さも頼もしい言葉である。

六　寶の舟

姫わ此時初めて座を立つて、お小夜の側えと進みより、

『お小夜ちやん！　ほんとによく尋ねて來てくれたのねエ。』

と、云いながらその手を取ると、お小夜もさも嬉しそうに、

『ほんとにお姫様も、よく御無事で居て下ださいましたネ。これからわもう大丈夫でございますよ。さア御供致しましよう。』

と、親しげに手を取つて、更に地の神に向い、

『それでわ地の神様！　いろ〳〵有難うございました。でわ水の神様、御厄介になりました。これからお姫様を御殿まで、私が御送り申します。』

『オ、、それがよかろう。』

と、地の神様もにこやかにうなづく。

其中に小人達わ、姫とお小夜を案内して、御殿の庭えと下り立たせると、其所に大きな池があつて、岸にわもう船がつけてある。船わ先刻乘りすてた船だ。

『それでわ地の神様、左様なら！』

『いろ〳〵有難うございました。』

と、禮を云つて二人の少女わ、やがてその船に乘り込むと、小人達わその前後に立つて、今しも櫂を取ろうとした。

と、俄に頭の上で聲がして、

『その船やらぬッ！』

と、叫ぶ者がある。

二人わ吃驚して仰むいたが、まだ何者も見當らない。

が、地の神にわ解ると見えて、ハタと空を睨めながら、

『またこの惡戯者めが！』

と、叱りつけたと思うと、忽ち正體を現わした。それわ例の森の主であつた。

見るから恐ろしい相好をした、森の主の若い魔物わ、雲の上から目を光らして、

『その船やらぬぞ。』

と、また叫んだが、流石に下えわ降りて來ない。

姫わ驚いてお小夜に取りつく。お小夜も身を堅くして、姫をかばいながら突伏してしまつた。

小人共わ大急ぎで、岸から船を漕ぎ出そうとしたが、何うしたものか動かない。

と、見ると地の神わ、手をかざして池の水に向い、

『水の神よ、水の神よ！　早く來て魔物を拂え！』

と、呼ぶと、見る〳〵池の中央から、高く水柱が立ちのぼり、その中から水の神が、さも勇ましく躍りあがると、いきなり森の主に打つてかゝつた。

森の主もそれと見ると、

『なんの小癪な！』

と、渡り合う。

その勢に、雲が破れると、それから凄まじい風が吹き出して、池の水を立騒がせ、見る〳〵中に姫の小舟わ、その浪に弄ばれて、今にも轉覆りそうになる。

『アレエ、助けてエ。』

と、姫わ魂も消え入る樣に叫ぶ。が、お小夜わそれを勵まして、

『お姫樣！　大丈夫でございますよ。』

とわ云うものゝ、實わ心配でならない。

『地の神様、地の神様！　何卒はやくこの船を、森の主の手の届かない所え出して下ださいまし！』

と、一心に頼んで居る。

地の神わ點頭いて、

『決して案じる事わないぞ。今暫時の辛抱ぢや。』

と、云いながら又空に向い、水の神と挑み合つて居る、森の主の頭をめがけて、手早く何やら投げつけた。

すると森の主わ、アツと一聲叫びながら、少し怯んで逃げようとする。所をすかさず水の神が、追いすがつて引捕え、尙振りほどこうとする魔物を、とう〳〵小脇に抱き締めて、地の神の前え降りて來た。

地の神わそれと見ると、直ぐに森の主を膝に引すえ、

『ヤイこの不孝者！　あれほど私が云つて置くのに、まだ惡戯を止め居らぬか。もう今日わ勘辨ならぬ。貴様にやつたあの森わ、今を限りに取りあげて、裸の野原え追いやつてしまうぞ。』

と、嚴しく叱り懲らして居る。森の主わ恐れ入つて、

『ア、お父様、御免なさい！　もうこれからわ致しませんから、何卒勘忍して下ださい！』

と、初の勢何所えやら、泣聲になつて謝罪つて居る。その間に又水の神わ、急いで此方の船え來ると、浪わもう少しも起らず、まるで疊の上を辷る様に、思う所え行かれる様になつた。

『お姫様、さぞお驚きでございましたろう。然しもう恐い事わございません。さアお送り申しましよう。』

と、水の神わ小人と一緒に、自分も船を押しにかゝつた。これに二人わ安心したが、見るとまだ彼方の岸でわ、森の主が地の神に、衣服も冠物も剝ぎ取られて居る様子だ。

『まア、あれわ何うするんでしよう？』

と、お小夜わ氣にかけて水の神に聞くと、

『あれわすつかり裸にされて、今日から木も草も無い、裸の荒野えやられるんです。』

と、いう。

『裸の荒野つて何所なんでしよう？』

『此所から北え遠く〳〵、凡そ三千里許り行つた所です。』

『まア可哀そうですねエ。』

と、我知らず眉をよせると、姫も同じ様に顏を顰めて、

『それわ私達をいぢめた罰なの？』

『然う云う理由なんでございましよう。』

『そうだと何だか氣の毒だわねエ。』

『ほんとに何うかならないもんでございましようか？』

二人わ顔を見合わせて居たが、やがて又水の神に向い、

『どうでしよう水の神様！　私達の爲めにあの方が、あんな酷い目に會うのだと思うと、何だかお氣の毒でなりませんから、何卒もう一度あの岸まで、この船をかえして下ださいませんか！　そうして私達から地の神様に願つて、森の主をもう一度、森え歸してあげる様にしたいんです。』

と、云うと、水の神わ感心して、

『オヽ、よい事を云つて下ださいました。全くあの男わ惡戯わしますが、何も根からの惡者でわありません。そうして仇を恩でかえして、同情をかけて下だされば、屹度心も入れかわつて、よい神になる事が出來ましよう。それなら私も一所に行つて、兄に一つ賴んで見ます。』

と、云う中に船をかえすと、間もなく元の岸え來た。

岸にわ裸にされた森の主が、震えながら泣いて居ると、もう地の神わ其所を立たうとして居る。此方の二人わ急いで行つてその神にむかい、水の神も口を添えて、一緒に森の主の謝罪をした。

元より憎くわない自分の子である。こう云われると地の神も、二人の志が嬉しいので、それでわ免してやりましようと、一旦剝ぎ取つた衣服と冠物を、また森の主え歸してやつた。すると森の主わ大喜び、姫とお小夜の手を取つて、嬉し涙に暮れて居たが、

『今迄貴女方を苦しめた代りに、今から私の魔力をば、善い事許りに使う事に致しましよう。』

こう云つたかと思うと、やはりその魔力の爲めか、何時か姫わお小夜と一緒に、船にも乘らず車にも乘らず　はや濱宮え歸つて居たが、その前にわ綺麗な小舟が、寶を一杯積みのせて、何所からともなくちやんと來て居た。

大波東說全集
中波美說全集
佐人

春音的假名遣廢止

小波お伽全集
第十一卷
長篇物語 終

昭和八年十二月十日印刷
昭和八年十二月廿五日發行

小波お伽全集 第十一卷
長篇物語 奥付

著作者 巖谷季雄 東京市芝區高輪南町五三番地
編輯者 木村定次郎 東京市代々木初臺五六二番地
發行者 吉田百邦 東京市深川區常盤町三ノ一番地
印刷者 尾崎元治 東京市深川區西六間堀二六番地

定價金三圓

不許複製
檢

發行所 東京市深川區常盤町二ノ一番地 吉田書店出版部
小波お伽全集刊行會
電話本所七一六番
振替東京三九八六六番

諸小波お伽画物語

執筆 伯

幼稚園・小學校及御家庭の皆々様へ此の基本的書帖・小波先生の懸命の良書をお勸め申上ます——

まだ學齢に達しない小さなお子様。及小學初年級の方々の爲に、美しい書を主とした、片假名と平假名とばかりの「小波書物語」を出版します。これは小波先生の全集に漏れたものを別卷として編纂し、假名遣も國定教科書に準據し、活字も大きく、挿畫の色彩にも注意し、娯樂の間に知らず識らず品性向上の目的を達し、且國史上の重要事蹟に通せしめることを主眼とします、何卒御愛兒お子様の爲に、一本をお求め下されますやう御願仕ります。（版元）

第一期刊行豫定

モモタラウ（コサブルカニトリ）
シタキリスズメ（ブンブクシブラウ）
カチカチヤマ（ハナサカヂヂキンタラウ）
はちまんたらう（べしんけいかうい）
おほえやま（らしやうもんきどうまる）
ちんぜいはちらう（あさひなげんざんみ）

幼稚園・小學初年級の無上の好良友

最新版

四六倍大判背クロース、表紙精巧な原色版、光彩燦爛、挿畫原色版彩色全頁畫入、美本堅牢製本、本文活字二號大の文字使用、全二十四卷の豫定

特價金八十五錢　定價　壹圓也　送料　金十二錢

東京市深川區常盤町
小波お伽全集刊行會

吉田書店出版部

振替東京三九八六六番
電話本所七一六一番

562
1144